

H I E
比 恵 遺 跡 群 23

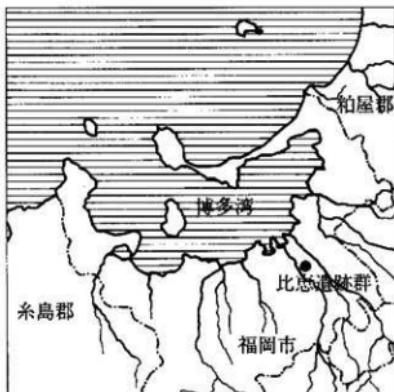
— 比恵遺跡群第54次調査・第56次調査 —

1997

福岡市教育委員会

H I E
比 恵 遺 跡 群 23

— 比恵遺跡群第54次調査・第56次調査 —

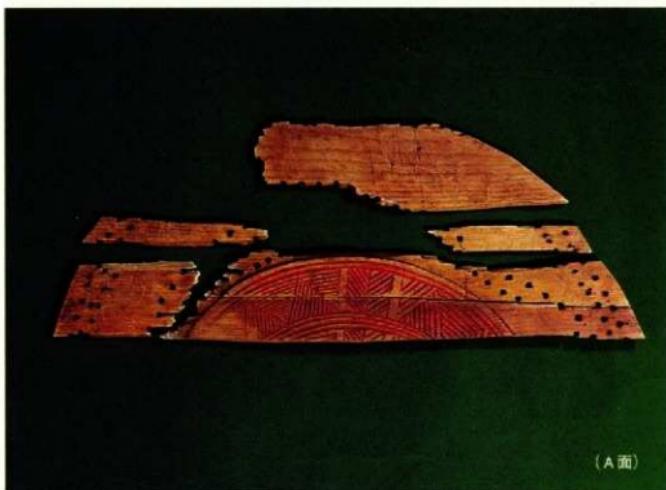


遺 跡 名	遺 跡 略 号	調 査 番 号
比恵遺跡群第54次	HIE-54	9443
比恵遺跡群第56次	HIE-56	9525

1 9 9 7

福岡市教育委員会

卷頭図版



(A面)



(B面)

赤彩有線刻画木製品

序

「活力あるアジアの拠点都市」として都市づくりを進めている福岡市には、古くから大陸との交流を物語る数多くの遺跡が所在しています。

本市では特に文化財の保護・活用に努めてきていますが、市内の都市基盤整備事業など各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のため発掘調査を行なっています。

本書は、博多区博多駅南四丁目の事務所ビル建設に先だって発掘調査を実施しました比恵遺跡第54・56次調査の報告書です。

発掘調査の結果、弥生時代の堅穴住跡や掘立柱建物・井戸などからなる集落を検出し、赤彩有線刻画木製品など貴重な資料を得ることができました。

発掘調査から資料整理・本書発行までの費用負担をはじめ、多くのご協力を賜った松井スミ様・田代喜代江様をはじめとする関係者各位に対し、心から感謝の意を表します。

本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

例　　言

- 本書は、博多区博多駅南四丁目18-29・15-1の松井スミ様・田代喜代江様による事務所ビル建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、1994年と1995年に発掘調査を実施した比恵遺跡第54・56次調査の報告書である。
- 本書使用の遺構実測図は、吉武学・白井克也・山口讓治・犬丸陽子・正林真由美・山口朱美（1994年）、大庭康時（1995年）が作成した。
- 本書使用の遺物実測図は、大庭康時・平川敬治・山口讓治・犬丸陽子が作成した。
- 本書使用の写真は、遺構を白井克也・大庭康時が、遺物を平川敬治・大庭康時が撮影した。
- 本書使用の図面の整図は、山口朱美・大庭康時が行なった。
- 本書使用の方位は磁北である。
- 本書の執筆・図集は、第4章を大庭康時が行ない、他は山口讓治があたった。
- 本調査出土遺物および調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

調査地点一覧表

調査地点	第54次調査地	第56次調査地
調査番号	9443	9525
遺跡略号	HIE-54	HIE-56
地図番号	037-0127	
調査地地籍	博多区博多駅南四丁目18-29	博多区博多駅南四丁目15-1
開発面積	280.87m ²	880.67m ²
調査面積	187m ²	523.59m ²
調査期間	1994年10月11日～同年11月22日	1995年9月7日～同年10月27日

本文目次

第1章 序 説	
1. はじめに.....	1
2. 調査体制.....	1
第2章 第54・56次調査地点の位置.....	3
第3章 第54次調査の報告	
1. 調査の概要.....	5
2. 調査の記録.....	7
第4章 第56次調査の報告	
1. 調査の概要.....	21
2. 調査の記録.....	23
3. 小結.....	30
第5章 結 章.....	31

挿図目次

Fig. 1	比恵遺跡群と周辺の遺跡	2
Fig. 2	第54・56次調査地地形実測図	3
Fig. 3	比恵遺跡群調査地点位置図	4
Fig. 4	比恵遺跡群第54次調査遺構配置実測図	6
Fig. 5	第1・6号井戸(SE-01・06)実測図	7
Fig. 6	第1号井戸出土土器実測図(1)	8
Fig. 7	第1号井戸出土土器実測図(2)	9
Fig. 8	第1号井戸出土土器実測図(3)	10
Fig. 9	第1号井戸出土木製品実測図	11
Fig. 10	第6号井戸出土土器実測図	12
Fig. 11	第4・5・7・8・10~12号堅穴住居跡出土土器実測図	13
Fig. 12	第13・14号堅穴住居跡および第3・15号井戸出土土器実測図	14
Fig. 13	各柱穴出土七器実測図(1)	15
Fig. 14	各柱穴出土土器実測図(2)	16
Fig. 15	各柱穴出土土器実測図(3)	17
Fig. 16	各柱穴出土土器実測図(4)	18
Fig. 17	遺構検出時出土遺物実測図	19
Fig. 18	山上鉄器・石器・土製品実測図	20
Fig. 19	土層柱状図	21
Fig. 20	遺構全体図	22
Fig. 21	第1号堅穴住居跡実測図	24
Fig. 22	第1号堅穴住居跡出土遺物実測図	24
Fig. 23	第2号堅穴住居跡実測図	25
Fig. 24	第2号堅穴住居跡出土遺物実測図	25
Fig. 25	第1号楕円柱建物跡実測図	27
Fig. 26	その他の出土遺物実測図(1)	28
Fig. 27	その他の出土遺物実測図(2)	29
Fig. 28	赤彩有線刻画木製品実測図	32

図版目次

卷頭図版 赤彩有線刻画木製品

PL. 1	1) 調査区西側全景(南から) 2) 剣合区東側全景(北から)
PL. 2	1) 第8号堅穴住居跡検出状況 2) 第10号堅穴住居跡遺物出土状況 3) 第1号井戸完掘状況 4) 第6号井戸完掘状況
PL. 3	第1号井戸出土土器(1)
PL. 4	第1号井戸出土土器(2)
PL. 5	1) 第1号井戸出土木製品 2) 第6号井戸出土遺物
PL. 6	堅穴住居跡出土遺物(1)
PL. 7	堅穴住居跡出土遺物(2)
PL. 8	各柱穴出土遺物
PL. 9	1) A区遺構検出状況(南から) 2) B区遺構検出状況(東から)
PL. 10	1) 第2号堅穴住居跡検出状況(北東から) 2) 出土遺物

第1章 序 説

1. はじめに

比恵遺跡群は、昭和13・14年に鏡山猛・森貞次郎氏によって最初の調査が行なわれて以来、弥生時代の代表的な集落遺跡として知られるようになった。しかし、その一方で、本遺跡群が所在する博多駅南地区は都市基盤整備が進み、事務所ビルなどの建設が相次ぎ、日々町並みは変化している。

埋蔵文化財課は1980年に、弥生時代の都市ともいわれている比恵遺跡群を重点地区の一つとして、開発計画があがると、遺構遺存状態確認のための試掘調査を実施し、各地点の状況の把握に努めている。そのうえで、開発者と遺跡保全のために設計変更などの協議を行なう。しかし、建築物の構造上、地下の遺構に影響を及ぼす場合は開発者と調査時期・調査費用などについて協議を重ね、協議事項が整い、調査契約を締結し、記録保存のための調査を実施している。

本書収録の調査地については、1994年8月19日と1995年3月14日にそれぞれ地権者から「埋蔵文化財事前審査願」が提出された。これを受けて、埋蔵文化財課はこれまでの発掘調査地および試掘調査地を確認し、申請地は開析谷に近接しているが遺構が所在する台地上とも考えられたため、1994年9月20日と1995年5月20日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、いずれも鳥栖ロームの面で弥生時代の遺構を検出した。この結果を受け、埋蔵文化財課は申請地全域に弥生時代の遺構群が遺存しており本調査が必要であると決定し、地権者と協議を重ねた。

地権者との協議事項が整い、発掘調査受託契約を締結し、調査事務所など条件整備完了後、申請地における各時期の様相把握を目的として、記録保存のための発掘調査を実施した。

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査であるため充分なる体制を組むことはきませんでした。

調査にあたっては、松井スミ様・田代喜代江様に調査費用をはじめとして、条件整備などで多大なるご協力をいただきました。また、仲介の労をとられた大和田正美様はじめとする関係者各位、および調査中ご理解とご協力を賜りました地元住民の皆様に、発掘調査が順調に進行したことを報告しますとともに、謝意を表します。

調査委託 松井スミ 田代喜代江

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

教育長 尾花剛（前） 町田英俊

文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 折尾学（前） 荒巻輝勝

調査担当 吉武学・白井克也・山口讓治（1994年）

大庭康時（1995年）

試掘調査担当 山口讓治・菅波正人（1994年）

山崎龍雄・池田祐司（1995年）

事務担当 西田結香

調査・整理協力者 大丸陽子・正林真由美・平川敬治・堀江佐和子・山口朱美



- | | | | |
|------------|------------------|-------------|------------|
| 1. 比恵遺跡群 | 7. 香原遺跡 | 13. 諏訪遺跡 | 19. 南八幡遺跡群 |
| 2. 福岡城 | 8. 那珂遺跡 | 14. 井尻遺跡群 | 20. 雄鶴園遺跡 |
| 3. 博多遺跡群 | 9. 那珂深ノサ遺跡・那珂君遺跡 | 15. 野多目遺跡 | 21. 須坎遺跡群 |
| 4. 堅和遺跡群 | 10. 板付遺跡 | 16. 野多目粘液遺跡 | |
| 5. 吉塚本町遺跡群 | 11. 三宅寺 | 17. 日佐遺跡 | |
| 6. 吉塚遺跡群 | 12. 五十川高木遺跡 | 18. 美野C遺跡 | |

Fig. 1 比恵遺跡群と周辺の遺跡

第2章 第54・56次調査地点の位置

福岡平野のほぼ中央部には、北流し博多湾に注ぐ那珂・御笠川があり、両河川の中流域から下流域にかけては中位あるいは低位の段丘が形成されている。特に両河川間の中流域は中位段丘が発達し、下流域では低位段丘が形成されているため、南東が高く、北西に向かって断続的に延び徐々に低くなる丘陵状をなしている。両河川の中流域から下流域にかけては、JR鹿児島本線・西鉄大牟田線・国道3号線という大動脈があり、県道・市道が走るなど都市基盤整備が進んでいる。したがって宅地化が進み、博多市街地と一体化し、一見平坦な地形となっている。しかし、この地域は多くの開析谷が発達し、両河川上流域と中流域境の標高60m前後から徐々に低くなっている。

両河川間には、先土器時代から人の生活が始まり、各時期の多くの遺跡が所在している。特に弥生時代から古墳時代にかけては、大規模な遺跡が集中している(Fig. 1)。

比恵遺跡群は那珂・御笠川流域間に所在する大規模な遺跡群の一つで、両河川下流域間の中位段丘の北端の標高5~7mに位置している。那珂・比恵では花崗岩風化礫層を基層とし、阿蘇山系の火碎流による八女粘土・鳥栖ローム層が堆積している。本遺跡群では60次に及ぶ本調査が実施されており、弥生時代前期初頭から人の定住が始まり、弥生時代中期後半以降、弥生都市とよばれる大集落が形成され古墳時代まで続き、古代以降近世までは希薄となる(Fig. 1~3)。

第54・56次調査地は、南北約1Km、東西0.8Kmの比恵遺跡群の中央部からやや北寄りの標高6mに位置している。国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から20.2cm、東から12.8cmにある。

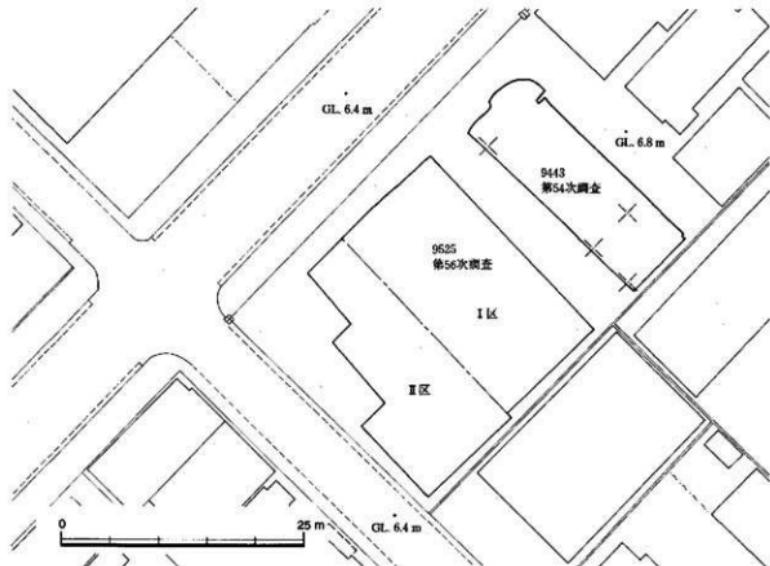


Fig. 2 第54・56次調査地地形実測図

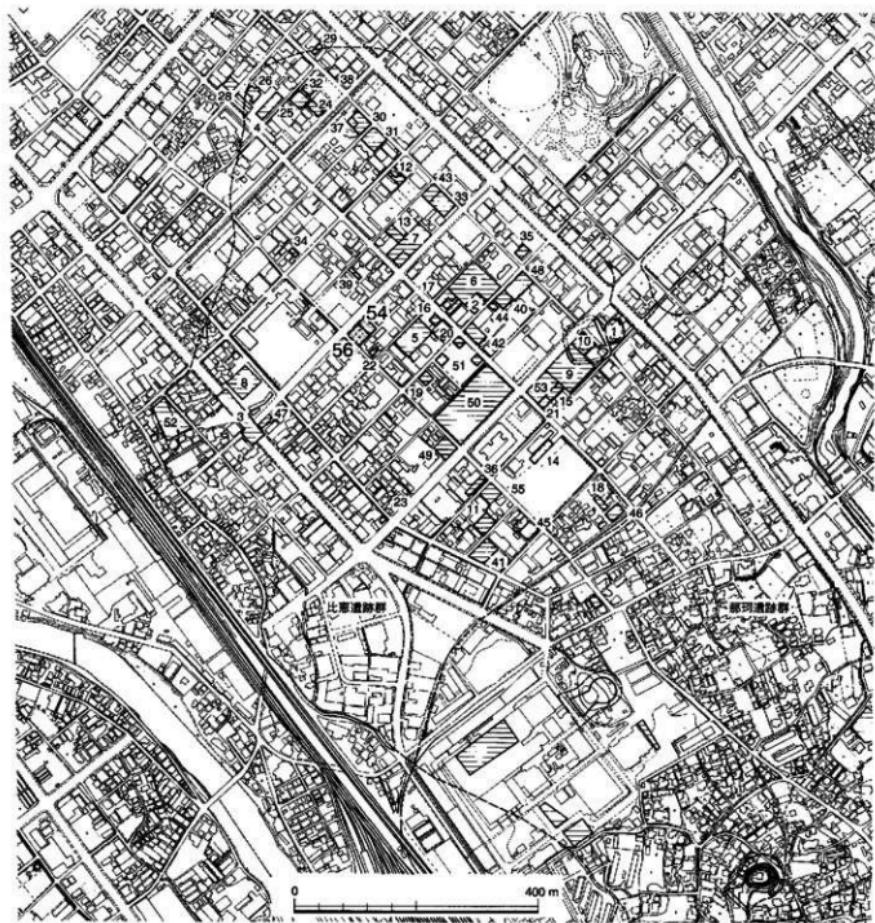


Fig. 3 北里遺跡群調查地點位置圖

第3章 第54次調査の報告

1. 調査の概要

1) 調査区の設定 (Fig. 2)

本調査地は第56次調査地と同一の地権者であり、同時開発を計画されていたが、地権者の都合で個別の調査となつた。本調査地の北西は幅3mの歩道をもつ15m幅の道路に面し、南側2面はブロック塀があり、東側は幅3.5m前後の私道に面し、調査対象地は南北29m強、東西9.5m前後の長方形を呈している。調査対象面積は280m²強あるものの道路側には水道・ガス管などの埋設物があり、建物建設計画も敷地の南半に予定されているため3.5~4mの引きをとった。南西ブロック塀側は塀が壊れてもよいとのことであり30cmの引きにとどめ、南東ブロック塀側は、1m前後の引きをとった。北東の私道側は、隣地境界を壊す恐れがあること、旧建物の布基礎が境界の1m西側に位置していることなどから1m前後の引きをとった。

以上の4方向の引きをとり、調査区を設定し、調査を実施した。

2) 調査の経過 (Fig. 4)

調査前は、事務所兼工場として使用されていたため比較的しっかりした基礎があり、土間が張ってあった。試掘調査で、十間の下に客土があり、地表下30cmで遺物包含層があり、50cmで鳥栖ローム層となる結果を得た。また、基礎は50cm以上の深さに達していることも確かめられていた。以上から、地権者に基盤はそのまままで土間を除去する協力をお願いし、撤出していただいた。

調査は、調査地は狭いが半分ずつ廃土を反転する方法を用いることとした。南側から西側のL字状の調査区を設定し、客土をバックホーで除去することから始めた。しかし緊急調査であること、充分なる調査体制が組めない状況にあつたため、遺物包含層の大部分を除去し、鳥栖ロームが一部みえる状態から遺構検出作業を実施した。遺構検出後は遺構の精査を行ない5mの方眼を設け、遺構実測を行ない遺物を取りあげた。その後、写真撮影を行ない廃土を反転し、同じ作業工程を繰り返し、埋め戻しを行ない本調査を終了した。

3) 検出遺構と出土遺物 (Fig. 4)

本調査区では、弥生時代の井戸・竪穴住居跡・掘立柱建物・土壙・炉跡・柱穴と、古墳時代の柱穴を検出した。これらの検出遺構は井戸をSE、竪穴住居跡はSC、掘立柱建物はSB、土壙をSK、炉跡はSRの遺構記号を使用し、2桁の通し番号を付した。なお、柱穴はSPの遺構番号を使用し、4桁の通し番号を付した（例 SE-01・SK-02・SR-03…SC-05・SB-19…、SP-0001…）。本文中では、遺構名、遺構記号は併記していく。

出土遺物は、弥生時代の弥生土器・土製品・石器・木器・鉄器と、古墳時代の土師器、中世の白磁がある。これらの遺物は、9443の遺跡調査登録番号を頭に付し、土器・磁器は00001～、木器は01001～、石器・土製品は02001～、鉄器は03001～と5桁の通し番号を付し、遺物登録番号とした。なお、本文中では調査登録番号をはずし、4桁で述べ、挿図・図版は5桁で表示する。

10m

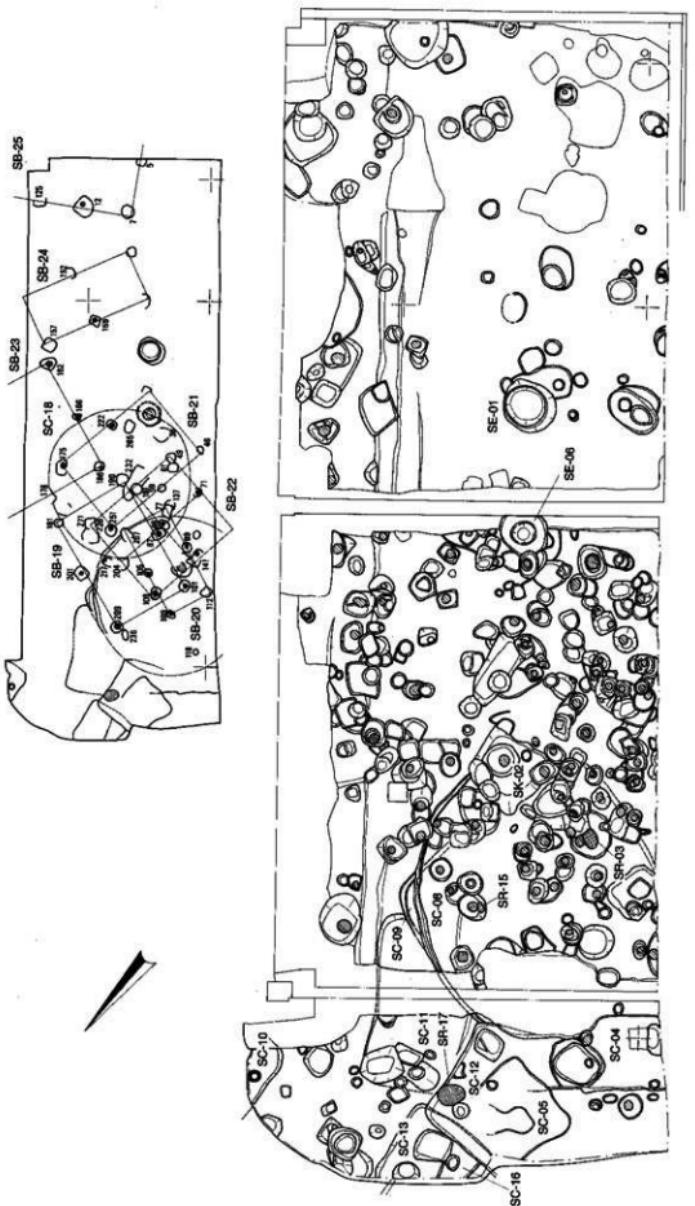


Fig. 4 比基河断面第54次调查测点配置示意图

2. 調査の記録

本調査では前述したように、井戸・竪穴住居跡・掘立柱建物・土壙・炉跡・柱穴の遺構を検出した。しかし、遺構分析・検討を尤分行なうことができなかつたため、出土遺物は可能な限り図化した。ここでは、現段階で確認した遺構についてみていくことにする。

1) 井戸 (SE)

第1号井戸 (SE-01) (Fig. 5 ~ 9 + 28, 卷頭図版, PL. 2 ~ 5)

本井戸は、本調査区の中央部からやや南寄りの標高5.85m前後の鳥栖ローム層の上面で検出した。検出面では径1m強前後の円形を呈し、鳥栖ローム層・八女粘土層を掘り貫き、含水層である硬砂層に達し3.15m遺存している。比恵・那珂遺跡群検出の弥生時代の井戸に普通みられる鳥栖ローム層と八女粘土層間の崩落はなく、検出面下50cmから下はほぼ垂直の状態で遺存している。

本井戸では、比恵遺跡群など福岡平野の弥生時代の井戸にみられる祭祀と考えられる完形土器の出土はなかったが、検出面から底まで遺物が出土した。検出面から1.5mの深さまでを上層とし、検出面から3.28mの深さまでを中層とし、それ以下の含水状態のものを下層として遺物を取り上げた。上層は遺物が比較的少なく、中層下半がもっとも多く、木器もこの層から出土したものである。下層もまとまった遺物が出土した。

上層出土遺物 (Fig. 6) 58~67は壺で、口縁は逆し字状をなすものが多く、一部くの字状をなすものも含んでいる。69は鉢、70は高杯、68は器台である。他に安山岩原石が出土した。

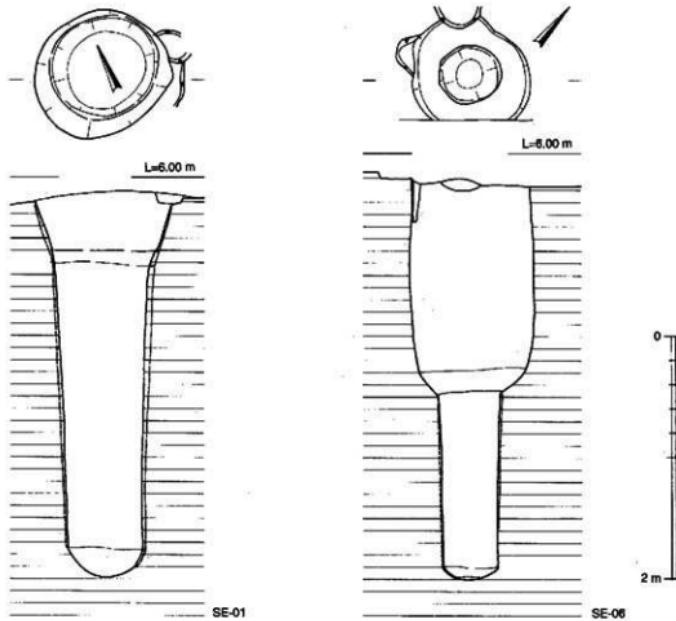


Fig.5 第1・6号井戸 (SE-01・06) 実測図

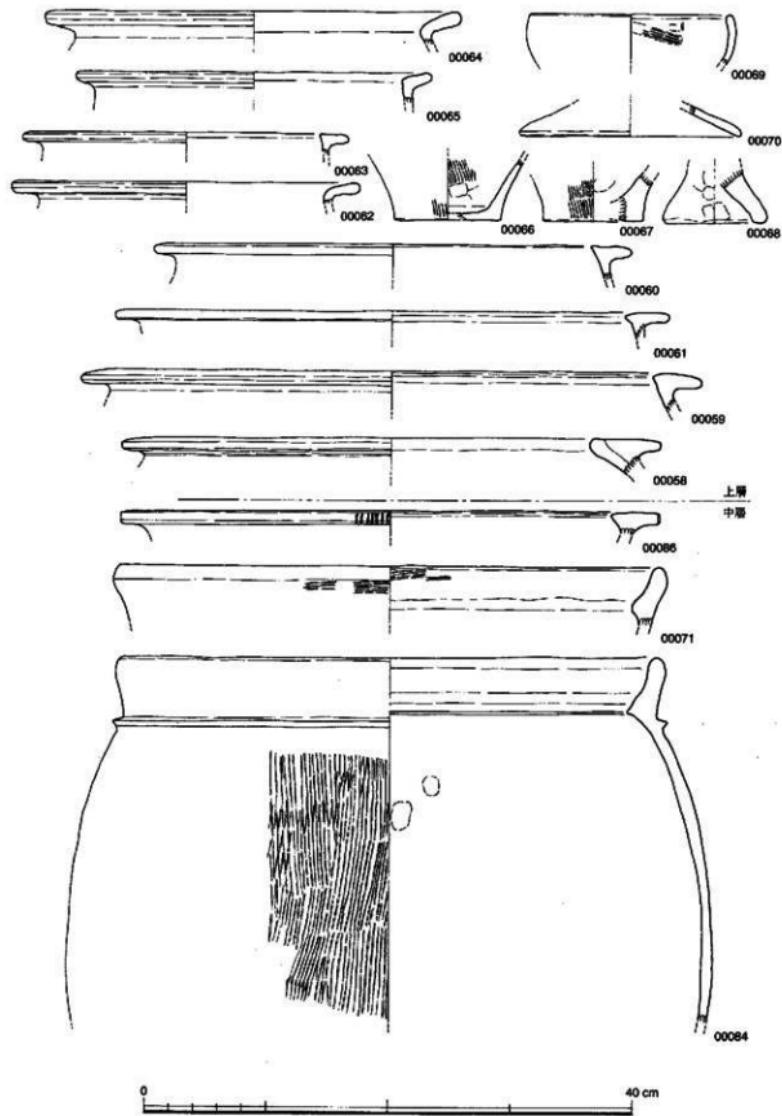


Fig. 6 第1号井戸出土土器実測図(1)

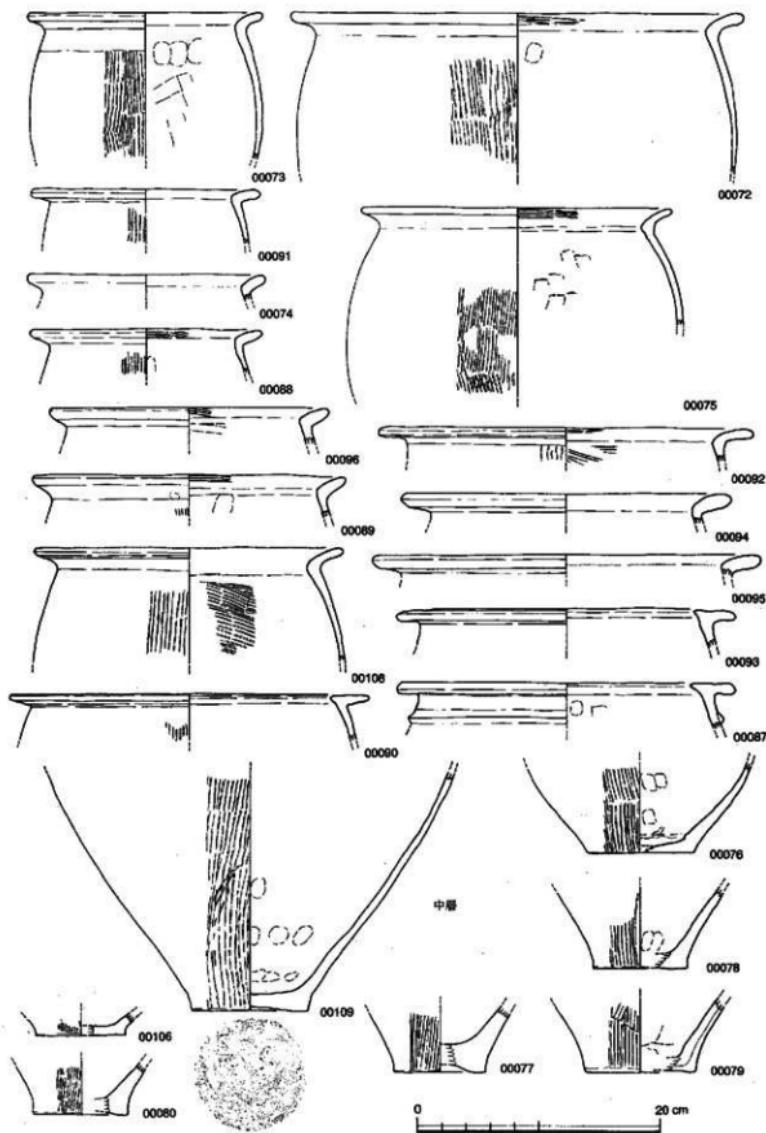


Fig.7 第1号井戸出土土器実測図(2)

中層出土遺物 (Fig. 6 ~ 9・28) 本層下半からは比較的まとまった遺物が出土した。71~82・84・86・96・0106・0108・0109は甕で、口縁はくの字状をなすものが多く、逆L字状をなすものが混じっている。0109の外底には粉などの圧痕がみられる。81・82・98~0100・0102・0104・0107は甕で、側先状口縁をもつ広口甕と胴から垂直に短く立ち上がってL字縁となるものがある。0103は無頸甕の蓋、0101・0105は高坏、他は器台。85は支脚か。1011は木鏃、1010は木製の容器で鉢か。1002は浮子、1001は赤彩有線刻画木製品で、1012~1015と同一個体の可能性がある。他は同一個体で建築部材か。

下層出土遺物 (Fig. 8) 0112~0118は甕で、口縁は逆L字状をなすものが多く、くの字状をなすものがある。0125は無頸甕の蓋、0119・0122~0124は甕で、0123は袋状口縁甕である。0126は高坏、0127は鉢の脚か。他は器台。

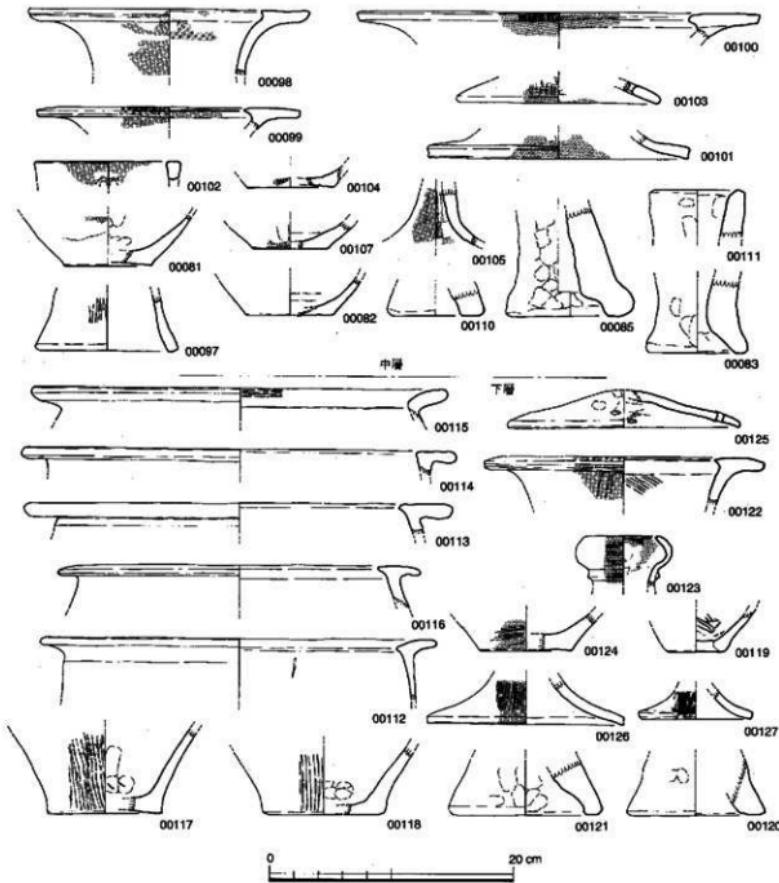


Fig. 8 第1号井戸出土土器実測図(3)

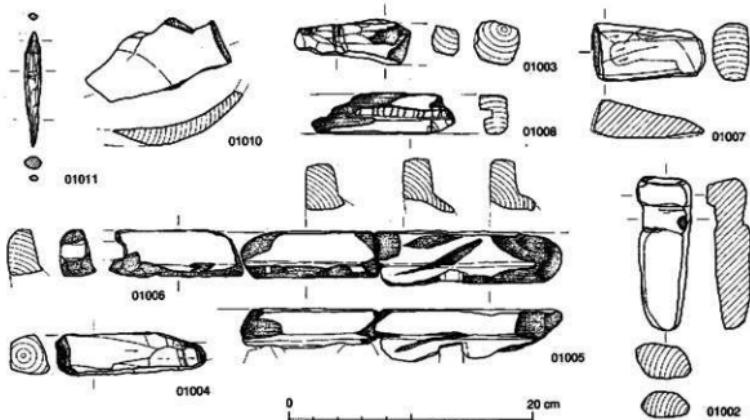


Fig. 9 第1号井戸出土木製品実測図

以上から、本井戸は含水層である硬砂層の湧水を利用した井戸で、弥生時代後期初頭頃短期間使用され、廃棄されたものといえよう。

第6号井戸 (SE-06) (Fig. 5・10, PL. 5)

本井戸は調査区のほぼ中央で検出し、布基礎およびそのヨゴレによって上部を破壊されているほか、SP-0040などの柱穴に切られている。検出面では径1m前後の円形を呈し、鳥栖ローム層・八女粘土層を掘り貫き、含水層である硬砂層に掘り込んでいる。検出面下1mの深さまで垂直に掘り、その下は径50cmで垂直に底まで掘り、検出面から底は3.2m強を測る。

出土遺物 (Fig. 10) 0128～0130・0132～0145は甕で、口縁はくの字状をなすものが多く、逆L字状をなすものが少量混じる。0131・0146は甕、0147は器台、0148は支脚か。

以上から、本井戸は含水層である硬砂層の湧水を利用したもので、弥生時代後期初頭頃に短期間使用され、廃棄されたものといえよう。

2) その他の遺構と出土遺物

本調査区の中央から北側にかけて、多くの柱穴を検出した。柱穴は竪穴住居跡のものと掘立柱建物のものがあるが、調査時の遺構精査面が鳥栖ローム直上で行なったためと、遺構と遺物の検討が充分にできなかつたため、ここでは一括して述べていくことにする。

竪穴住居跡 (SC) と出土遺物 (Fig. 4・11・12・18, PL. 2・6・7)

確認した竪穴住居跡としては、SC-04・05・08～13・16・18の10基があり、あと4～5基あったと考えられる。SC-08・18は平面形円形で、径は6～6.5mを測ると考えられる。SC-08はSR-03を中心土壌とし、SC-17は長軸1.4m、短軸0.6mの土壌を中心土壌として復元した。他は平面形方形を呈するものである。

出土遺物 (Fig. 11・12・18) 01～10はSC-04出土で、甕と壺がまとめて出土した。1122はSC-05

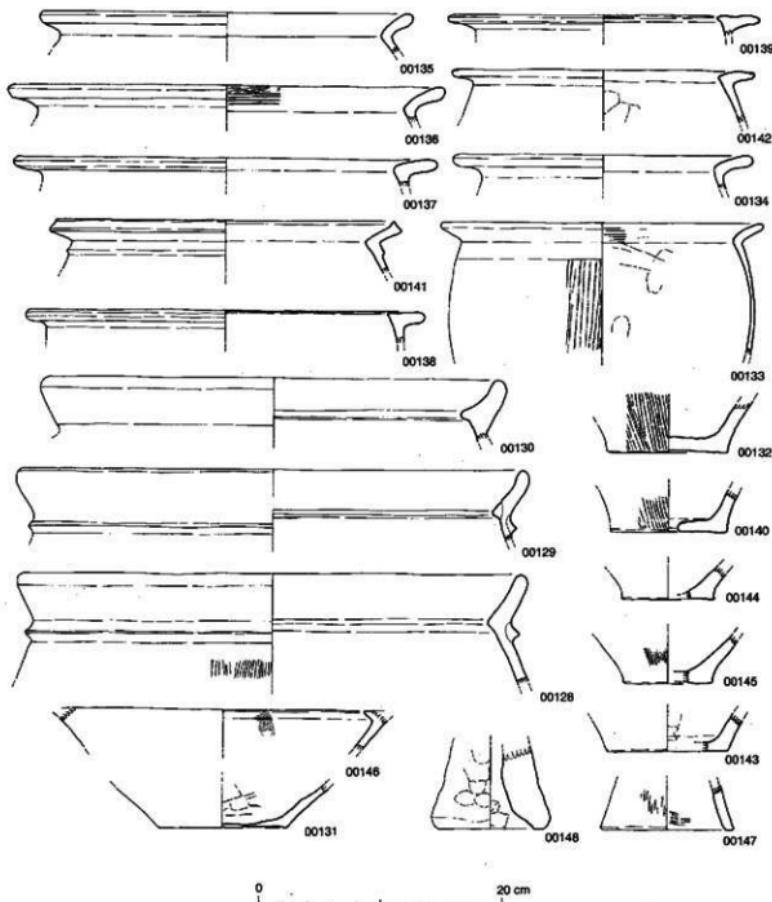


Fig.10 第6号井戸出土土器実測図

の出土で、逆L字状口縁をなす壺と壺がまとめて出土した。29・30・2007はSC-12の出土である。2007は凝灰岩ホルンフェルス製の石製穂摘具である。31~42・2002はSC-13の出土で、2002は土製投弾。SC-13は壺のほか、壺・鉢・支脚が出土している。SC-05・12は同一住居跡の可能性が高く、この字状をなすベットをもつ住居跡で弥生時代後期前半頃のもので、SC-04は中期後半まで遡るか。26は本調査区北東端のSC-10の床面密着の状態で出土した壺の口縁部で、他に無頭壺の蓋・磨石が出土した。本住居跡も中期後半から末頃のものか。25・2006はSC-08から、51~53・2003~2005はSR-03から出土したもので、51~53は焼土中からの出土、土製投弾は焼土を含まない埋土の出土である。焼

土は別の住居のものか。

以上、検出住居跡は弥生時代中期後半から弥生時代後期前半頃のものといえよう。

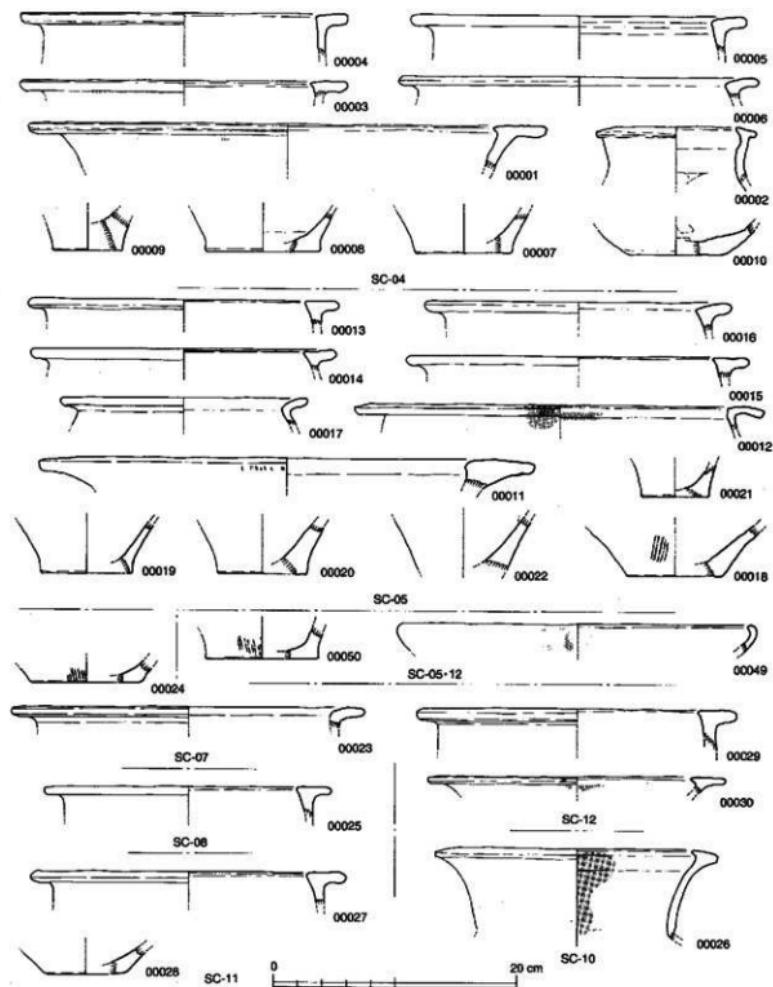


Fig.11 第4・5・7・8・10~12号竪穴住居出土土器実測図

掘立柱建物 (SB) (Fig. 4)

本調査区では、SB-19～25の7棟の掘立柱建物を検出した。いずれも梁行1間、桁行2間の建物で、柱間は2m前後～2.5m前後を測るものが多く、梁行は3.2m前後を測るものも含んでいる。各柱穴の出土遺物をみていくと、弥生時代中期から古墳時代初頭までの遺物があるが、弥生時代中期後半から後期前半にかけてのもののがもっとも多い。古墳時代の柱穴も少しみられるが、弥生時代のなかでおさまる柱穴が大部分であるといえる。

以上、検出遺構について簡単に紹介した。小結の項だけをしてまとめるべきであるが、紙面の関係上、第5章の結章で本調査成果についてまとめることとする。

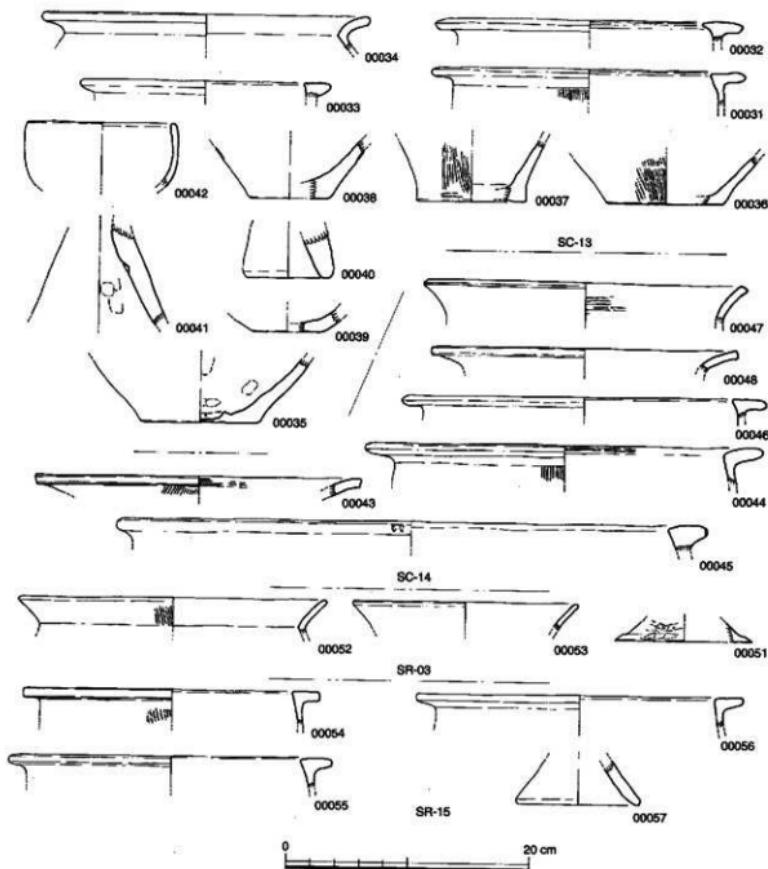


Fig.12 第13・14号竪穴住居跡および第3・15号跡出土土器実測図

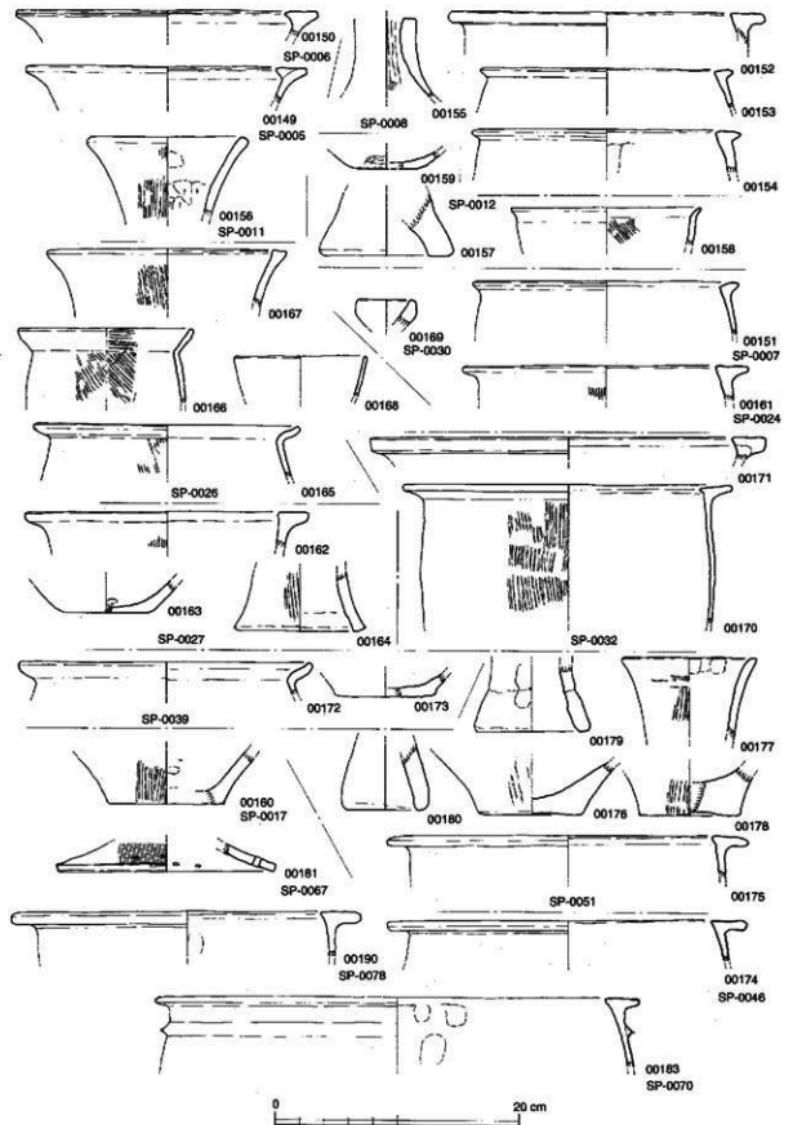


Fig.13 各柱穴出土土器実測図(1)

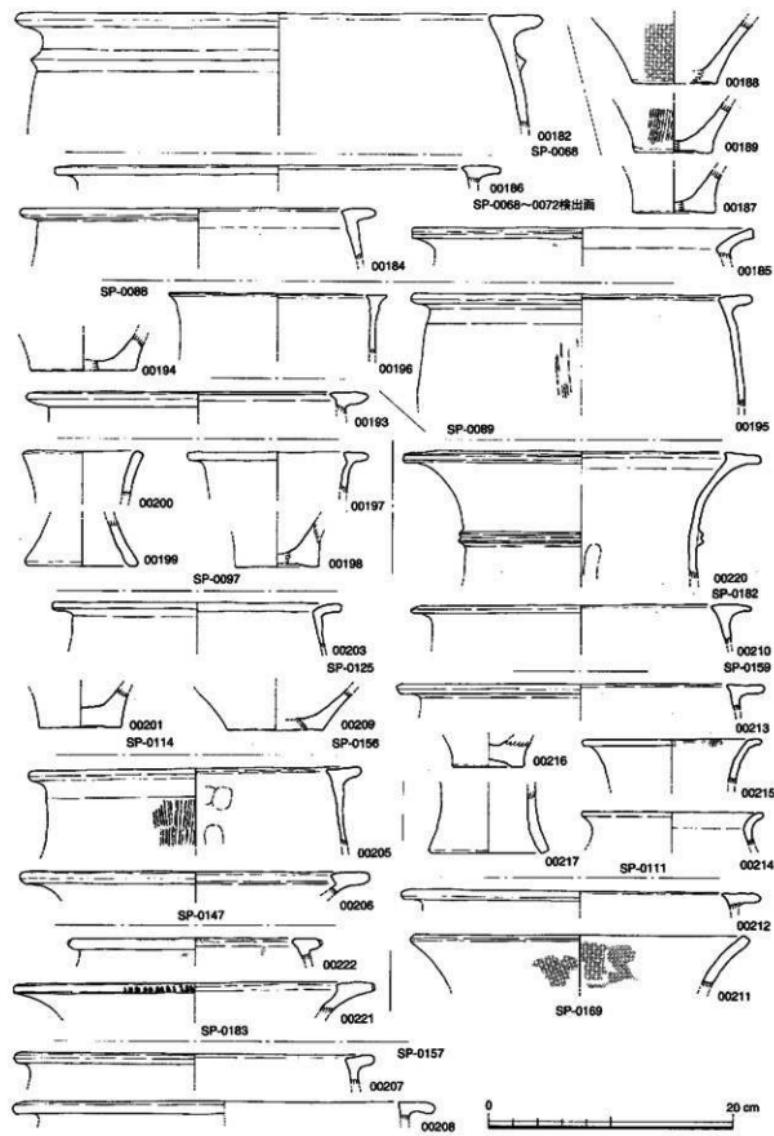


Fig.14 各柱穴出土土器実測図(2)

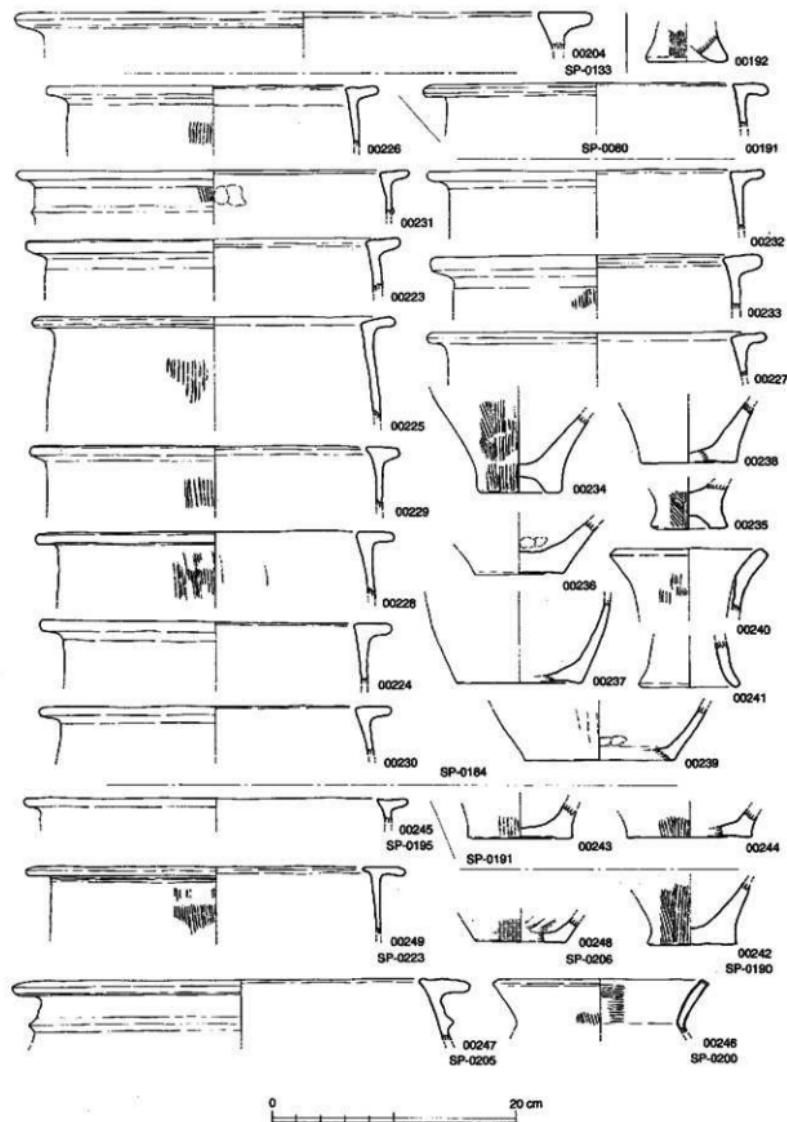


Fig.15 各柱穴出土土器実測図(3)

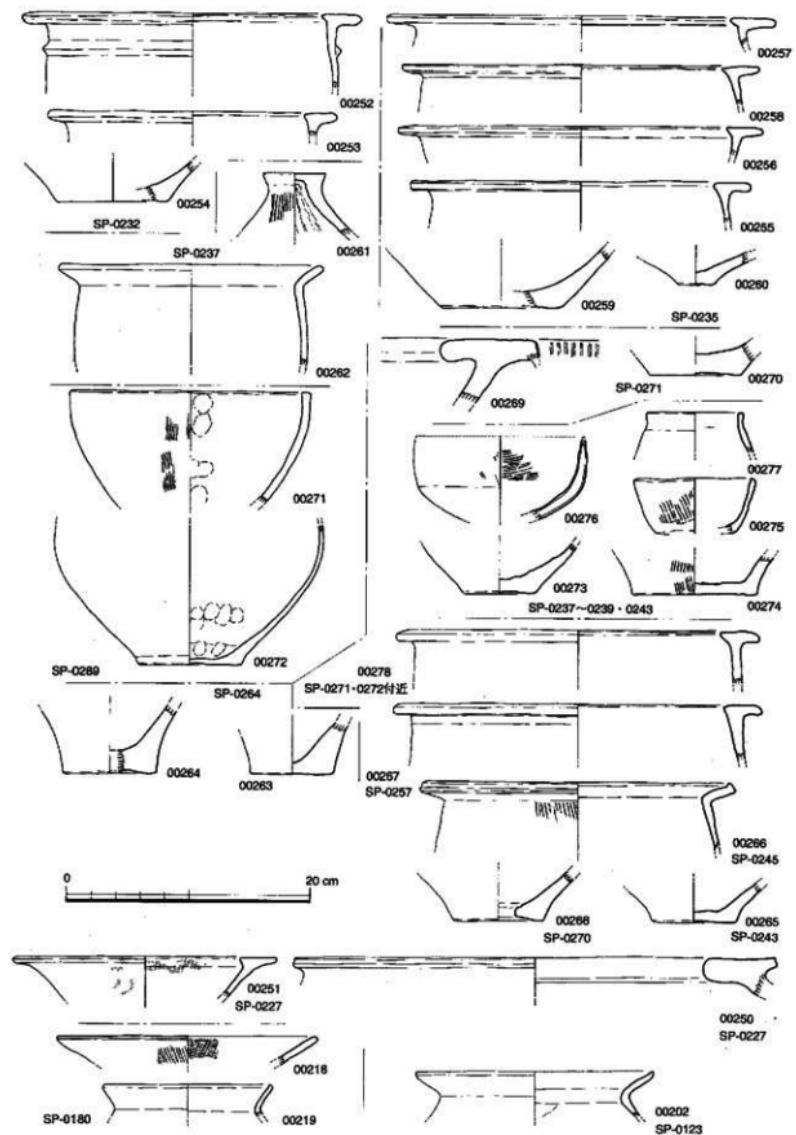


Fig.16 各柱穴出土土器実測図(4)

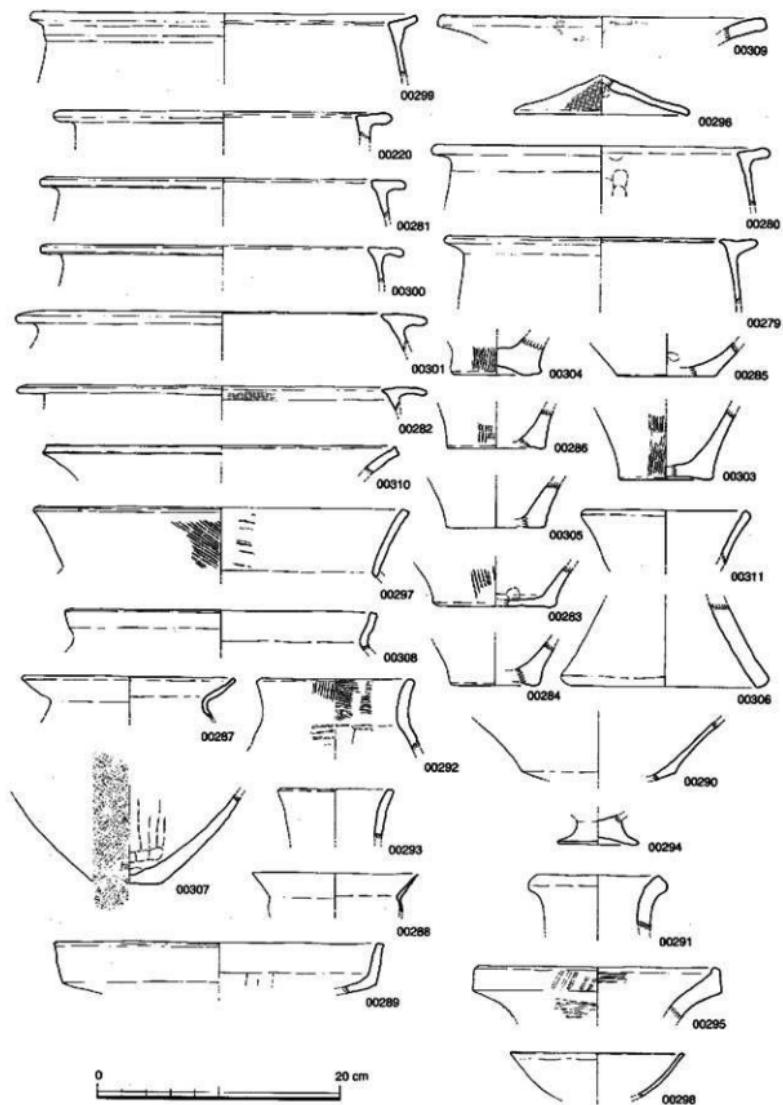


Fig.17 遺構検出時出土遺物実面図

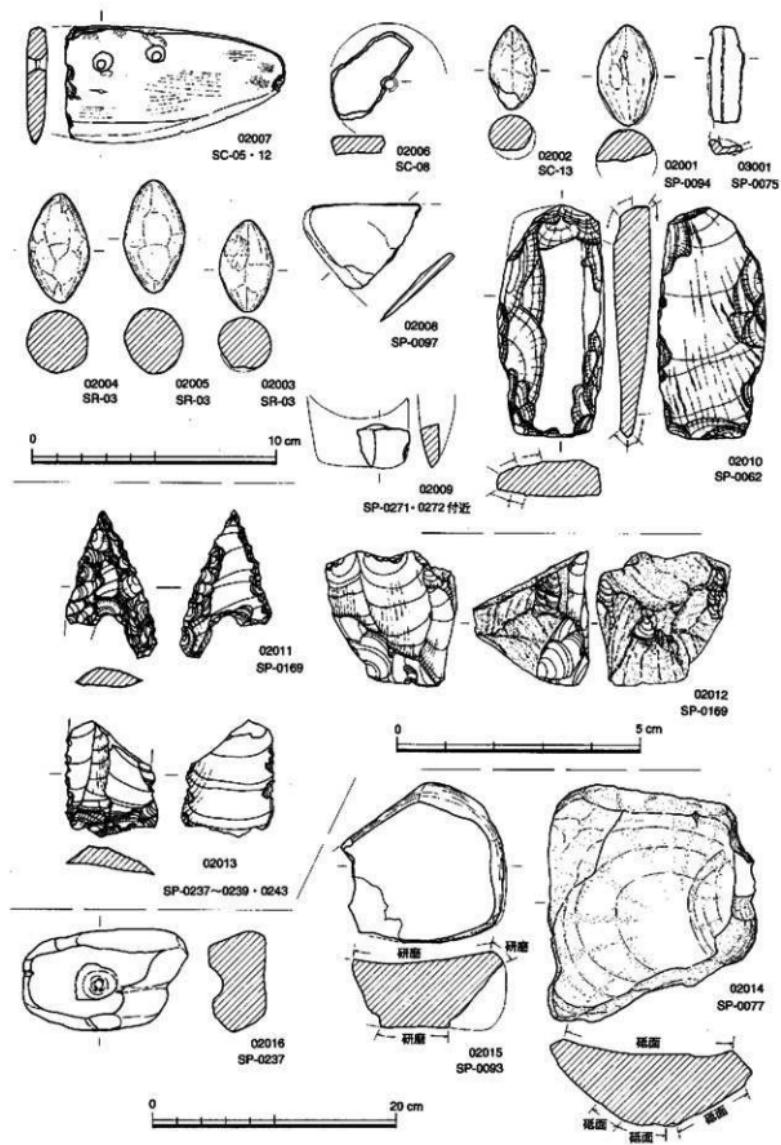


Fig.18 出土鐵器・石器・土製品実測図

第4章 第56次調査の報告

1. 調査の概要

1) 調査の方法

申請地には、試掘調査の結果、1メートル前後にも及ぶ厚い盛り土層があることが判明していた。発掘調査に当たっては、この盛り土を除去するために、バックホーを使用し、遺構検出面まで掘り下げるに至った。なお、一部に比較的厚い包含層がみられたため、この部分に関しては人力で削除した。ただし、後述するように、本来の地形はすでに大きく切り下げられていると見られ、包含層も二次的な堆積にすぎない。

調査対象は、申請地の全面であったが、隣地及び前面道路からの養生、調査事務所部分など、周間に事実上発掘できない部分が残った。したがって、申請面積880.67平方メートルのうち523.59平方メートルの調査に留まっている。

発掘調査に当たっては、残土の搬出ができなかつたため、打って返しをせざるを得なかつた。まず、遺構密度が高いことが予想された東側半分に着手し（A区）、その終了後残土を移動させて西側半分（B区）を調査した。さらに調査区全面は、既存建物のコンクリート基礎によって細かい矩形に分割されていた。これをそれぞれ1～8区とし、遺構実測、遺物取り上げを行つた。

遺構は、すべてを柱穴・土坑・溝の種別ごとに通し番号とし、遺物取り上げもこれによって行つた。遺構実測は、全面に街区に応じた2メートル方眼をかけ、20分の1で平面図を作成した。土層の堆積状況については、非常に単純な堆積状況であったため、B区の南西隅近くで柱状図を作成するにとどめた。遺構写真は、35ミリと6×7判で、それぞれ白黒とカラースライドフィルムで撮影している。

2) 発掘調査の経過

発掘調査には、1995年9月7日より着手した。9月7日、8日の2日間で、A区の表土剥ぎを行い、大庭が出張から帰った12日から遺構検出を開始した。調査に際しては、コンクリート基礎で仕切られた各ブロックごとに、遺構検出と精査を行つた。

A区の調査は、10月9日の全景撮影、11日の掘り残し部分の掘り上げをもつて終了し、12・13日にバックホーで打って返し、B区の調査に取りかかった。B区もA区同様に調査を進め、10月23日に埋め戻し、24日に調査器材を撤収し、発掘調査を終了した。

3) 基本層序

柱状図をもつて、層序を説明する。1層—バラスによる盛り土、2層—暗褐色土、遺物包含層、3層—明灰色砂質土、比較的硬くしまる、4・6層—黄色土、やや砂質、5・7層—灰色土、やや粘質、8層—黄褐色粘土=鳥栖ローム層。

基盤である鳥栖ローム層は、大きく削平を受けており、4～6層は耕作土とみられる。したがって、2層の包含層は、二次堆積と考えられる。

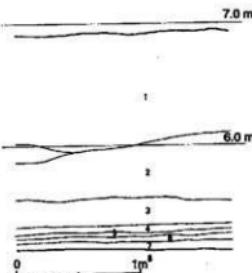


Fig. 19 土層柱状図 (1/40)

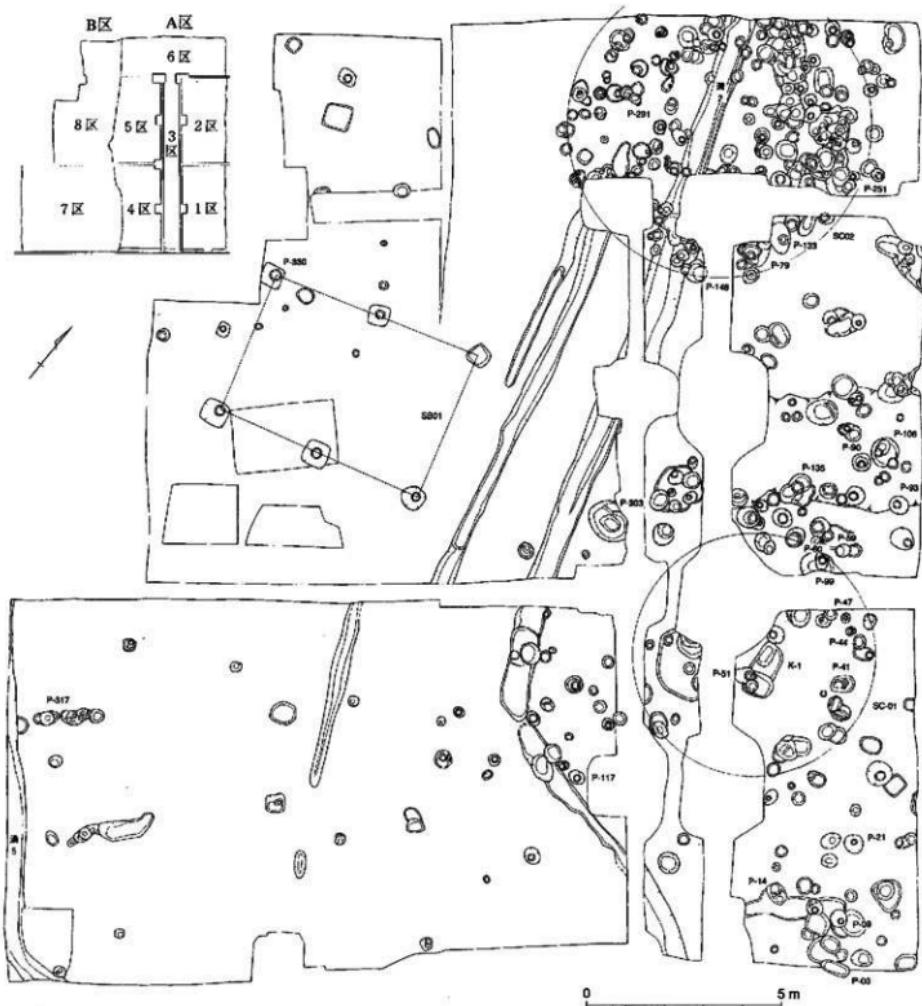


Fig.20 遺構全体図 (1/125)

2. 調査の記録

本調査では、柱穴・土坑・溝などの遺構が検出された。遺構は、すでに大規模な削平を受けたものと思われ、遺存状態は良くなかった。遺構密度は、東側で濃く、西側ではかなり希薄であった。これは、削平の程度にもよると思われるが、西向きの緩傾斜面という地形を反映した結果を見るべきかも知れない。

遺物は、弥生時代土器片がコンテナケース 8 箱、石器が同 1 箱弱出土した。弥生時代前期と中世の陶磁器が若干見られた以外は、ほとんどが弥生時代中期の遺物である。

1) 壴穴住居跡

削平のため、壁の立ち上がりや礎溝を検出できた竪穴住居跡は、まったくなかった。しかし、柱穴の配置からみて、弥生時代中期の円形竪穴住居跡が二棟推定できた。

第 1 号竪穴住居跡 (SC-01)

1 区・2 区・4 区にまたがって推定した円形住居跡である。1 号土坑を中心にして、その両側にすぐ接して 2 本の柱穴を配している。主柱穴は、6 本を確認した。柱の間隔は不揃いであるが、おおむね直径 6 メートルの円周上に配置されている。

柱穴から出土した遺物を Fig. 22 に示す。1 ~ 4 は中央土坑横の SP-51、5 ~ 10 は主柱穴である SP-99 から出土した弥生式土器である。いずれも器壁表面の摩滅が著しく、調整痕はほとんど残っていない。

1 ~ 3・5 ~ 8 は、甕である。口縁部は、逆 L 字形につくる。1 ~ 3・6・7 が体部からほぼまっすぐに立ち上がって口縁部にいたるのに対し、5 の頸部は大きく内傾するという特徴を持つ。8 は、上げ底に作る底部である。4・9 は、器台である。4 の外面には、縦方向の刷毛目調整が薄く残っている。10 は、壺の口縁である。ほぼ水平に面を整えた口縁部上面には、2 本を単位とした沈線が施される。このほか、Fig. 27-43 に図示した頁岩製の扁平片刃石斧が、中央土坑 (SK-01) から出土している。

第 2 号竪穴住居跡 (SC-02)

2 区・3 区・6 区にまたがって推定した円形住居跡である。二重に主柱穴を巡らせた住居が、規模を変えて建て直されたものと思われる。柱の間隔は不揃いで、その配置もややいびつである。遺構図に破線で示した住居の主柱穴は、柱穴の切り合い関係で見る限りもっとも古くなるもので、建て替えられた住居の当初の姿であろう。不整形ではあるが、おおむね 6 メートルの直径をはかる。内周の柱穴の配置は、直径約 2.8 メートルをはかる。

実線で示したのは、おそらくもっとも規模が大きくなった段階での住居である。直径 7.5 メートル前後の不整形形を呈する。内周の柱穴列は、ほぼ直径 4 メートルの円周上に配置されている。なお、主柱穴から、葺きおろされた屋根、立ち上がった壁体までの空間を加味すれば、建物の平面規模は、直径 10 メートルを優に超えるものと推定できる。

柱穴から出土した遺物を、Fig. 24 に示す。1 は SP-251、2・3 は SP-291 から出土した。いずれも当初の住居跡の主柱穴からの出土である。1 は壺である。表面を丁寧に磨き、赤色顔料を塗るいわゆる丹塗り磨研の土器である。口唇部には、小さい刻み目が施される。2 も丹塗り磨研の壺であるが、表面が摩滅し、部分的にかすかに丹が残るにすぎない。3 は、逆 L 字形口縁の甕である。表面は摩滅し、調整痕はまったく見られない。

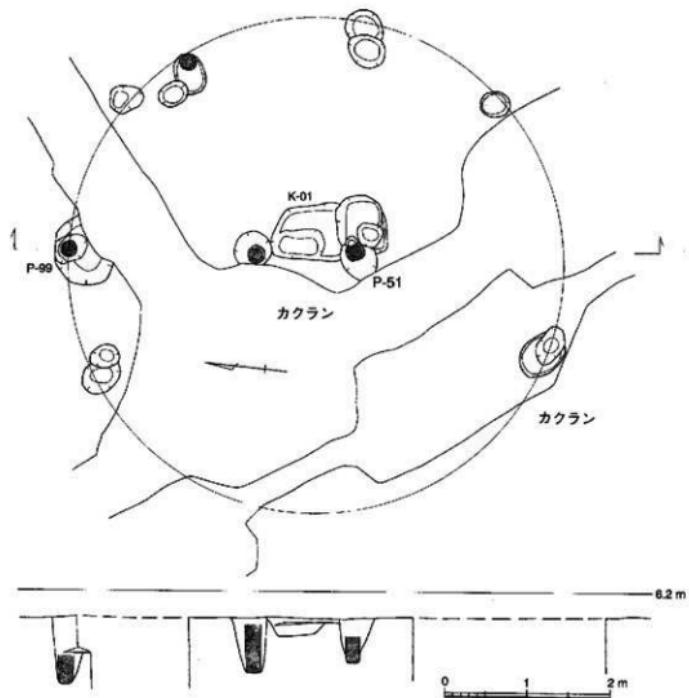


Fig.21 第1号墳穴住居跡実測図 (1/60)

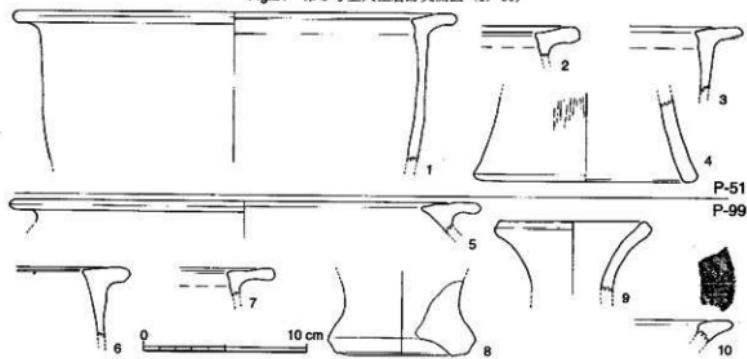


Fig.22 第1号墳穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

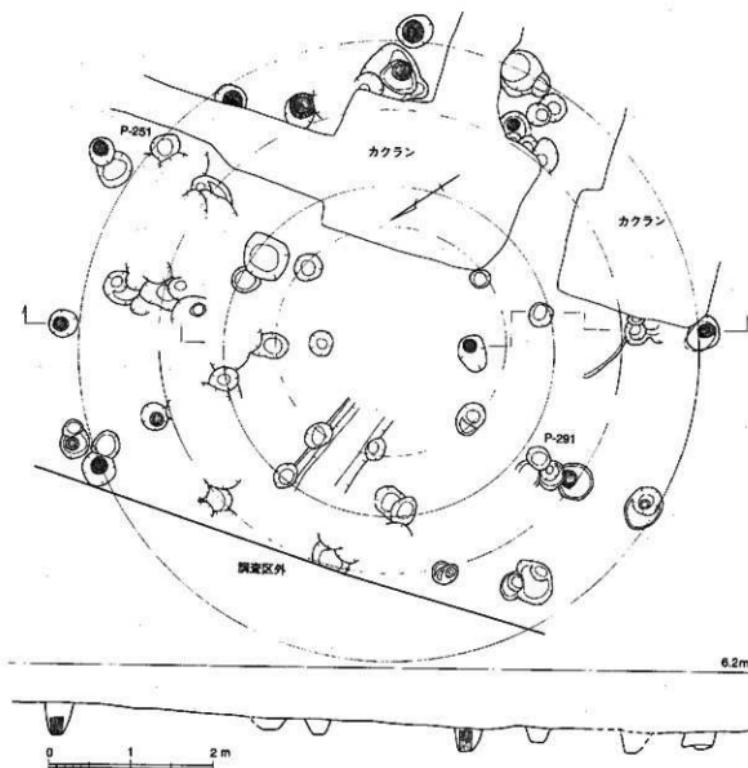


Fig.23 第 2 号堅穴住居跡実測図 (1/60)

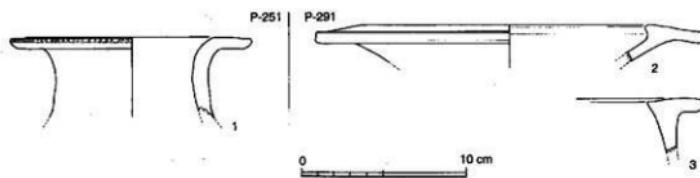


Fig.24 第 2 号堅穴住居跡遺物実測図 (1/3)

2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡一棟を、5区と6区にまたがって検出した。梁間1間、桁行2間を確認しているが、桁方向はさらに西に延びる可能性がある。柱間は、梁で385~400センチ、桁で275~290センチをはかる。したがって、1間の長さを仮に190センチ前後にとって比較すれば、2間×3間の規模を持つと言えよう。

柱穴の遺存状態はあまり良くなく、検出面から20センチ前後が残っていたにすぎなかった。埋土は、黒色の粗砂で、黒褐色の粘土を埋土とする他の柱穴とは明らかに異なっていた。

柱穴は、一辺50~60センチのほぼ方形の掘り方を持ち、5基の柱穴で柱痕跡が確認できた。それによれば、柱は丸材で直径24~30センチをはかる。

遺物はほとんど出土していないが、SP-330から数点の出土を見たので、Fig. 27-34~36に図示した。34は、壺の口縁部である。「く」の字形に折り返した口縁で口唇部が若干肥厚する。器壁は摩滅しており、調整痕は残らない。35は、壺の底部である。平底の底部がわずかに凸レンズ上に丸みを持って下がる。柱痕から出土した。36は、鉢であろうか。内傾した口縁端部を、平に面取りし、沈線を引く。

これだけの遺物から掘立柱建物跡の時期を判断するのは危険ではあるが、他の柱穴から出土した小片にも、明らかな土師器・須恵器は含まれていないことからみて、大雜把に弥生時代後期を当てるることは許されるだろう。

3) その他の出土遺物

Fig. 26・27に、これまで触れられなかった遺構から出土した遺物を図示し、主な遺物について略述する。なお、それぞれが出土した遺構は、図中に示している。

1は、壺の底部である。SP-03の埋土中位に、横置で出土した。体部上半の破片は出土しておらず、初めから壺の下半部分を埋設したものと思われる。底部は、平底だが、わずかに乗れ気味で、底部と体部の境も鋭さを欠く。体部外面には、かすかに綫方向の刷毛目調整痕が認められる。

9は、壺の口縁部である。横方向の撫で調整をした上から、外面は粗く綫の範磨き、内面はまばらに横磨きを暗文状に加える。なお、外面の頸部下位には、横方向に沈線が巡っている。

16は、壺の口縁部である。赤色顔料が塗られている。

23は、前期の小型壺である。底部と口縁部を欠く。体部外面は、丁寧に範磨きされる。内面は、撫で調整である。肩部には沈線で有軸羽状文が、頸部には2本を単位とした綫の平行沈線が施される。ただし、施文の高さ・間隔は揃わず、割合と雑な感がある。

25は、前期の壺である。如意状に外反した口縁を持ち、頸部には、2条の沈線が巡る。器壁は摩滅しており、調整はうかがえない。

30は、口縁部の小片である。赤色顔料が残っており、丹塗り土器と知れる。

37・38は、白磁の皿である。施釉後口縁端部の釉を搔き取る、いわゆる口禿である。39は、青磁の盤の口縁である。厚く施釉される。40は、褐釉陶器の盤である。緑褐色の不透明釉が施される。以上4点は、2号溝(SD-02)から出土した。13世紀後半を当てることができよう。

41は土製、42は滑石製の紡錘車である。

44は、磨製石劍の先端部の破片である。中央部には、鏽が明瞭に研ぎ出されている。2区の包含層(SX-01)から出土した。

45は、石包丁である。輝緑凝灰岩製。

46は、黒曜石の剥片である。佐賀県の腰岳産の黒曜石と思われる。

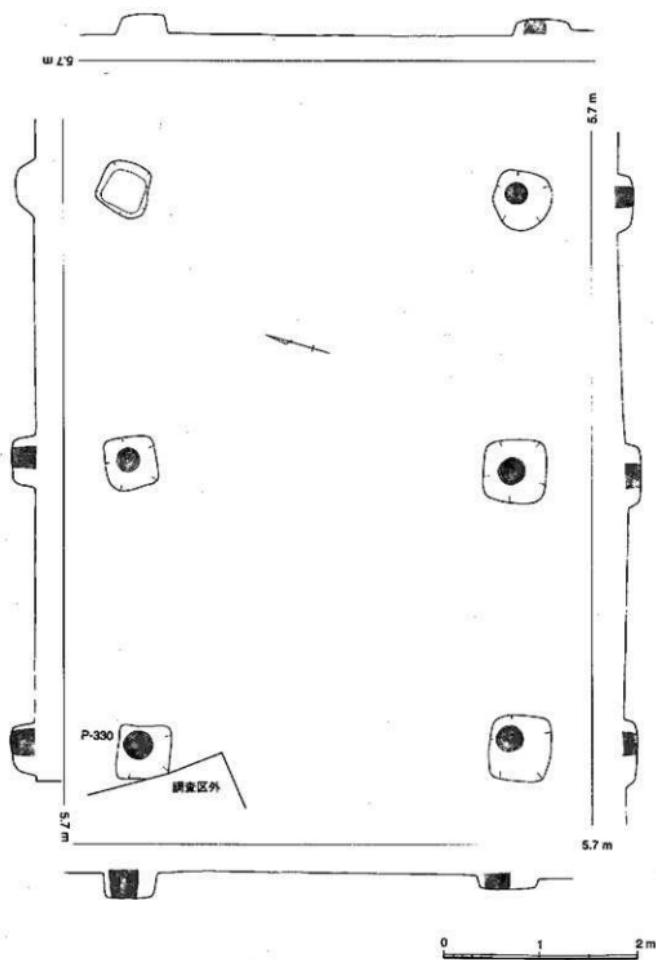


Fig.25 第 1 号獨立柱建物跡実測図 (1 / 50)

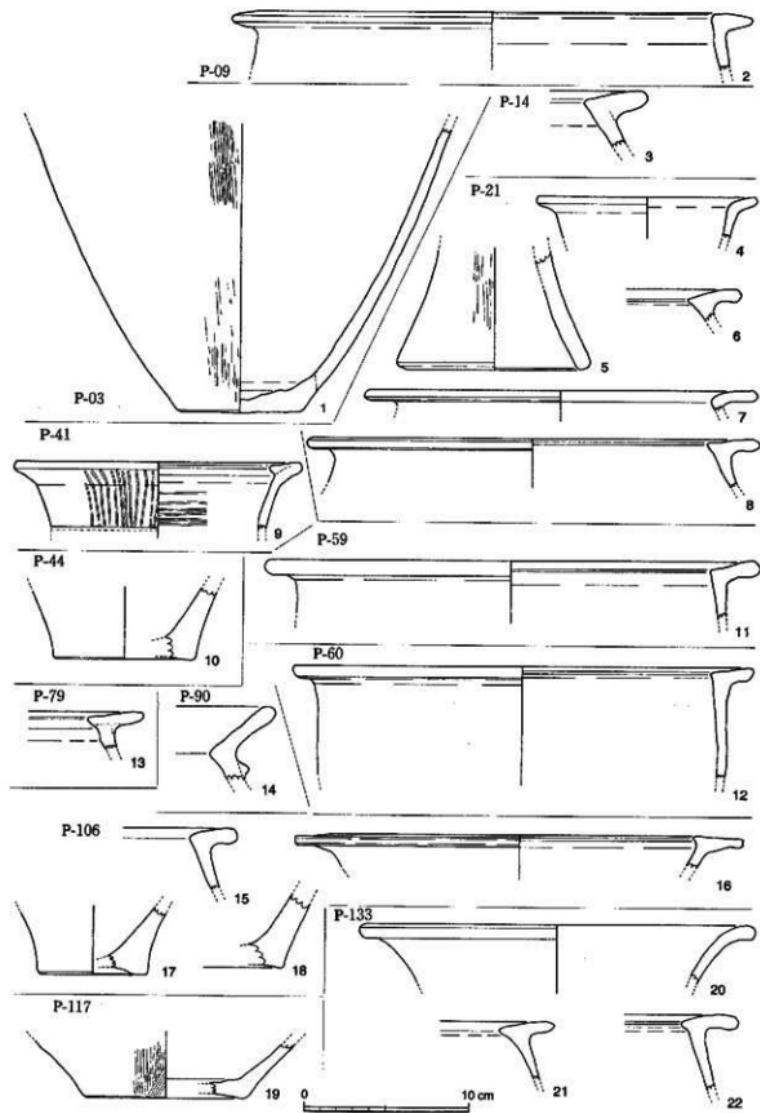


Fig.26 その他の出土遺物実測図1 (1/3)

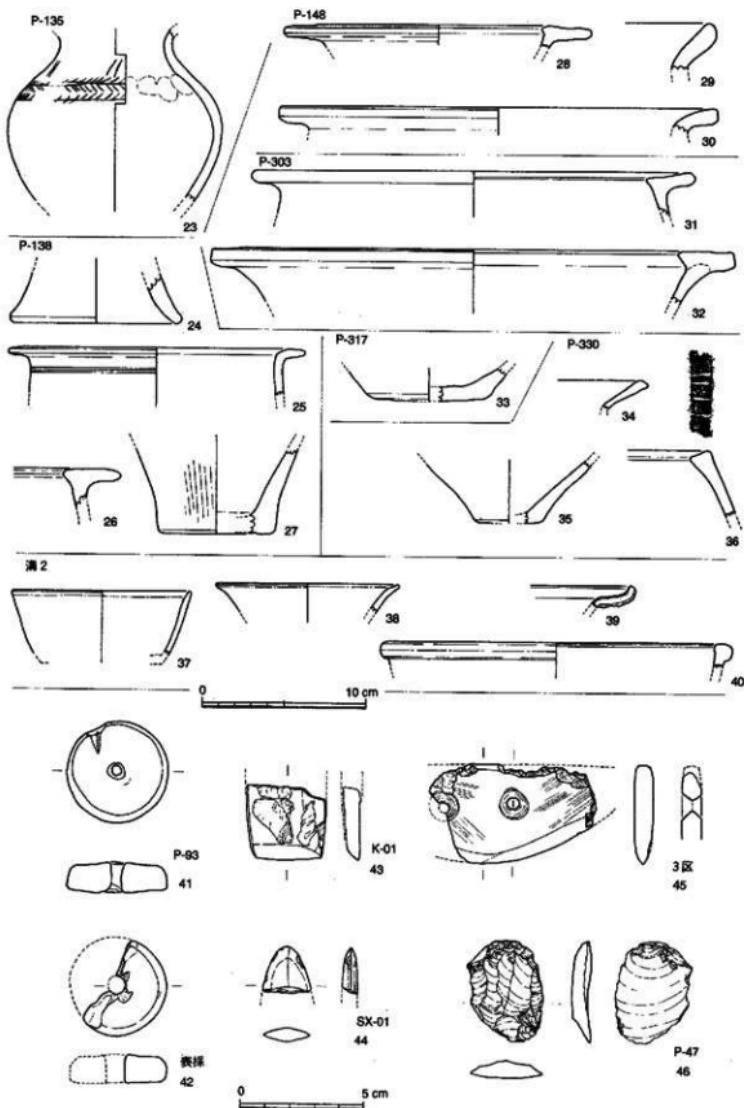


Fig.27 その他の出土遺物実測図2 (1/3, 1/2)

3. 小結

以上、比恵遺跡群第56次調査の成果について略述してきた。この概報を終えるに当たり、これまで述べたことと重複するが、簡単にまとめておきたい。

1) 調査地点の立地　　比恵遺跡群は、那珂川と御笠川にはさまれた低丘陵上に営まれた遺跡である。この丘陵は小規模な谷地形を含んで、複雑に入り組んだ形をなす。本調査地点は、比恵遺跡群が立地する丘陵の西辺近くに発達した谷地形の、西向き斜面に位置する。

2) 発掘調査の概要　　重機による表土・盛土の除去の結果、遺構面は若干削られていること、地山面が東から西に大きく傾いていたことが確認された。ただし、この地山面の傾斜が旧地形を正しく反映したものなのか、単に削平によるもののかは、土層観察からは判断できなかった。昭和十年代の地図などから復元できる本来の地形からみて、上述した旧地形上の立地は明かである。それを加味すれば、地山面の高低差が旧地形を反映しているものと考えたい。

発掘調査で検出した遺構は、柱穴・土坑・溝状遺構などである。柱穴は深いものが多く、その配置から弥生時代中期の円形堅穴住居跡2棟程度、後期の掘立柱建物跡1棟が推定できる。また、溝1条が調査区西辺で検出された。

これらの遺構は、小規模な谷地形の西斜面に当たるためか、遺構密度が東で濃く、西で極端に薄い傾向を示した。堅穴住居跡は、調査区東半分に集中し、掘立柱建物跡は西半分から検出した。掘立柱建物跡は弥生時代後期に比定できるもので、建て替えもなく、堅穴住居跡が営まれていた少なくともその前半期には存在しなかった。東に隣接する第55次調査地点では、当該期の集落遺構が検出されており、本調査地点の東半分の堅穴住居跡が、この集落の一部であることは明かである。したがって、本調査では、弥生時代中期から後期にかけて、比恵の一丘陵上に立地した集落の西端を確認したものと考えて良かろう。

なお、2号堅穴住居跡は、主柱穴から推定すると直径10メートルにも及ぶもので、数回の建て替えが想定できる。これらの点からみて、本集落における中心的な住居と見ることができる。

その後、弥生時代後期後半以後の建物遺構は、まったく検出できなかつた。集落が廃絶したか、移動したものと見られるが、周辺の他の調査例からみて後者であろう。少なくとも、本調査地点は、集落の場からはずれてしまったのである。

2号溝からは、13世紀後半の陶磁器が出土した。2号溝は、灰褐色の砂質土を埋土とし数列平行する溝のひとつであり、耕地に関わるものと思われる。これらの点からみて、本調査地点は、13世紀後半以降耕地化したものと考えられる。

比恵遺跡群の発掘調査は、地点を移しながらも現在も続いている、第55次調査・第56次調査地点の南では平成八年度に第59次調査が実施された。今後、これらの調査成果を総合して考察することが必要であり、本調査はそのための資料を提供したものといえる。比恵遺跡群の今後の調査に期待して、報告を終ることにする。

第5章 結章

比恵遺跡群は、那珂川・御笠川下流域の中位段丘北端の標高5～7mに位置している。南北1km、東西0.8kmの本遺跡群は、80ヶ所前後の遺構遺存状況を確認するための試掘調査を実施し、60次の発掘調査を実施している（1997年3月現在）。第54・56次調査地は、これまでの本遺跡群の発掘調査および試掘調査結果から、本遺跡群のなかでもっとも規模の大きい開折谷の東側隣接地にあたると考えられる。また、弥生時代中期から本遺跡群は弥生時代の都市ともよばれる大集落が形成されるが、第54・56次調査においても、中期から後期前半の堅穴住居跡・掘立柱建物などからなる集落が確認された。尚調査地は、西隣接地に開折谷をもつ弥生時代中期後半前の比恵集落（街）の北西部に位置しているといえよう。第54・56次調査成果については前章小結でまとめられており、ここでは第54次調査地第1号井戸から出土した赤彩有線刻画木製品について述べていくことにする。

赤彩有線刻画木製品（Fig. 28, 卷頭図版）

弥生時代中期末から後期初頭と考えられる第1号井戸の中層下半から下層にかけては、植物遺物が出土した。植物遺物としては、枝などの小木と種子類が多いが、15点の木製品を検出した。ここでは、1001と同一個体と考えられる1012～1014および1015についてみていくことにする。

1001は、残存長4.7cm、最大幅24.4cm、最大厚1cm、最小厚0.4cmを測る。1012は、残存長1.4cm、幅8.3cm、最大厚0.3cm。1013は、残存長1.5cm、幅9.4cm、最大厚0.5cm。1014は、残存長3.8cm、幅7.6cm、最大厚0.45cm。1015は、残存長4.4cm、幅15.9cm、最大厚0.6cm。いずれもヒノキのナメ取り材を用いている。遺存状態が良い1001は、中央部に径19.8cm（A面）・21.1cm（B面）の隆起した円弧をもち、その中に鋸歯文をアレンジした幾何学文を精巧に線刻し、多紐細文鏡にみられるような文様構成をつくり出している。また、中心円弧隆起部は赤色顔料を塗布している。円弧状をなす縁が一番厚く、その内側に縁に沿って2条、中心円弧に近づく形で2条の小孔列がみられ、A面の外側2条とB面の内側2条の小孔間に圧痕がみられる。縁が破損している箇の中心円弧側の小孔には、他の材が詰まっている。1012～1014も1001と同様の小孔列があり、同一個体といえよう。1015は1001と同じヒノキを用材としているが、小孔列の配列が異なることから別個体か。表裏には刃線痕がみられるが、線刻画とは判別できない。

1011・1012～1014は表裏に赤色顔料を塗布し、精巧な幾何学文様（円弧・鋸歯・綾杉文を組合わせる）を陽刻した円弧の隆起部をもち、その外に4条の小孔列をもつ板製品である。出土時は、復元径が31.5cm前後にされることから籠の上板と考えた。しかし、表裏に文様部があること、この時期になると赤色顔料を塗布する製品は武具や儀器的なものにしか使われないことがから、日常雑器ではないだろう。武具ならば何になるか、可能性としては盾が考えられる。盾としてみると、表裏に文様があることから、本体ではなく上部に飾りをもつものがあれば可能性はあるといえよう。マスコミ報道の時は盾としたが、柄などが不明であり、断定はできない。その他の儀器としては、銅鏡の上部の文様構成と類似することから銅鏡の板製品とも考えられるが、遺存部が少ないと、周辺の小孔列は必要ないこと、出土例がないことなどから考えにくいといえよう。鏡形とすると表裏に文様があり、これも問題がある。表裏に文様帯があり、赤色顔料を塗布し目立つものであること、小孔に経を通した痕跡があること、文様構成が多紐細文鏡や銅鐸と共通性があること、本製品が奴国（のこく）の入口と考えられる比恵遺跡群の出土であること、出土地が比恵中央集落の北西端に位置していることなどが本製品の用途

を暗示しているといえないだろうか。そこで、この赤彩有線刻画木製品は屋外標式的な用途をもつものと考えた。比恵集落の入口（港）に掲げられた比恵集落（奴国）の標式は、ロマンにみちた本製品の用途であるといえよう。

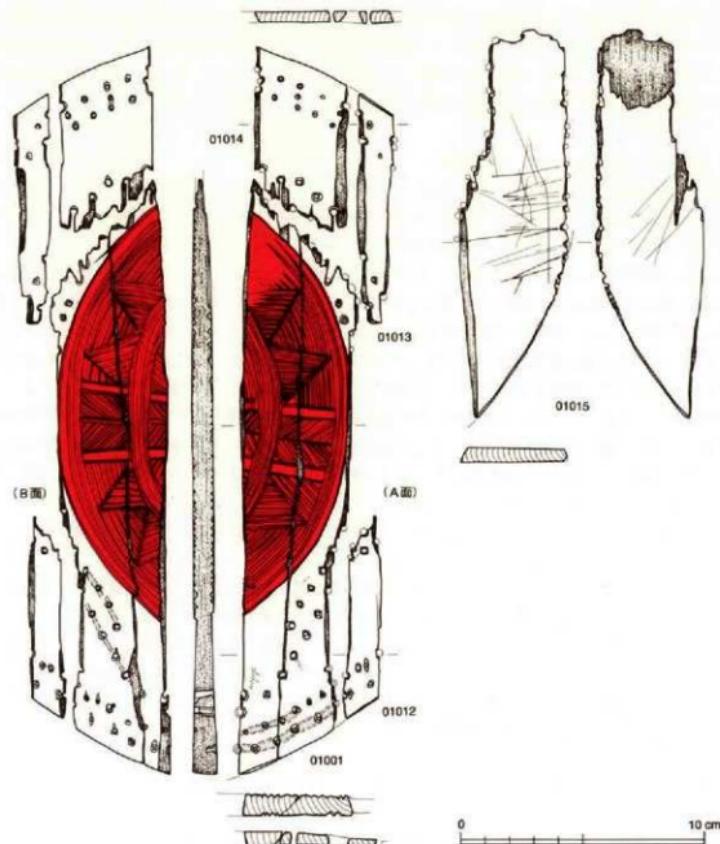
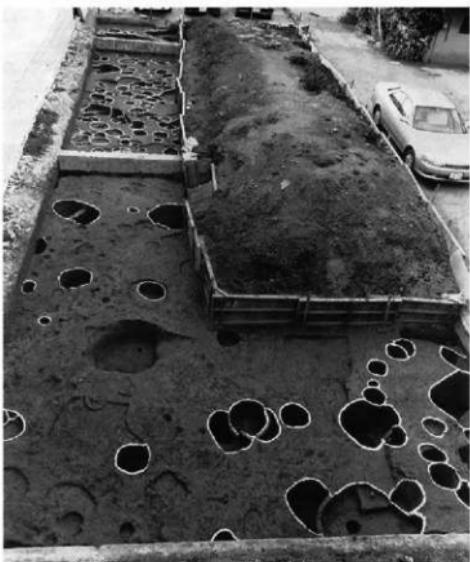


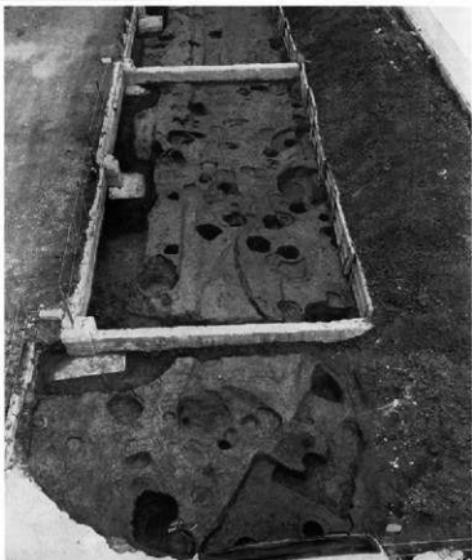
Fig.28 赤彩有線刻画木製品実測図

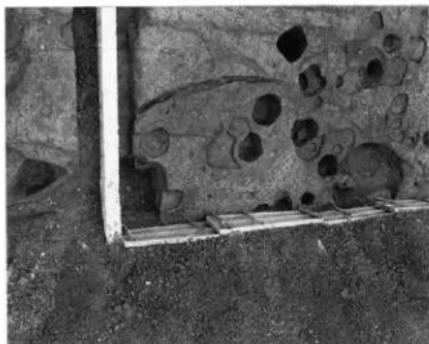
図 版

1) 調査区西側全景 (南から)



2) 調査区東側全景 (北から)

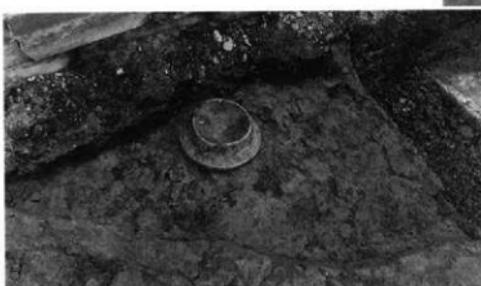




1) 第8号竪穴住居跡検出状況



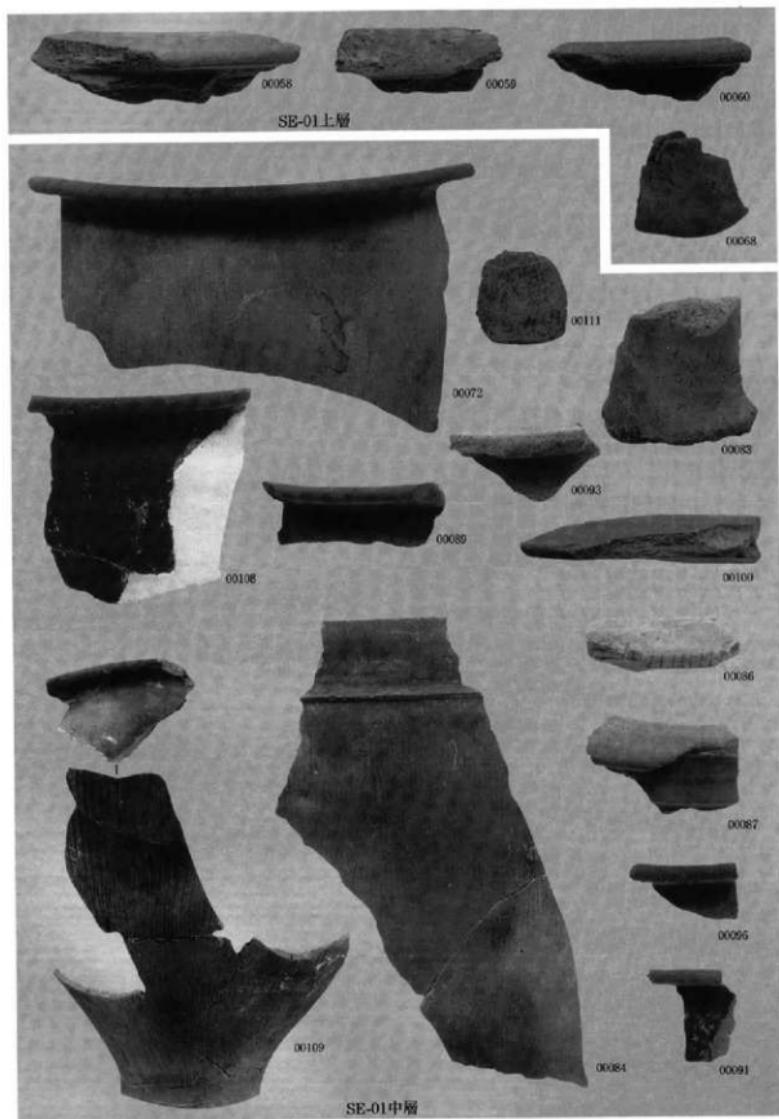
3) 第1号井戸完掘状況



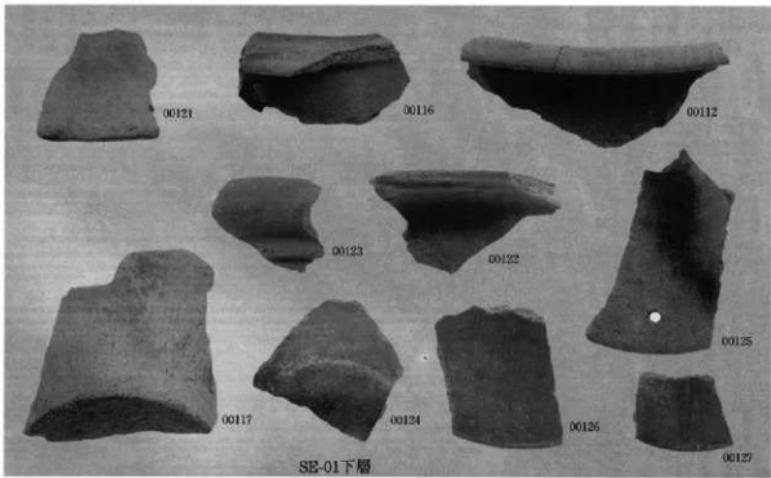
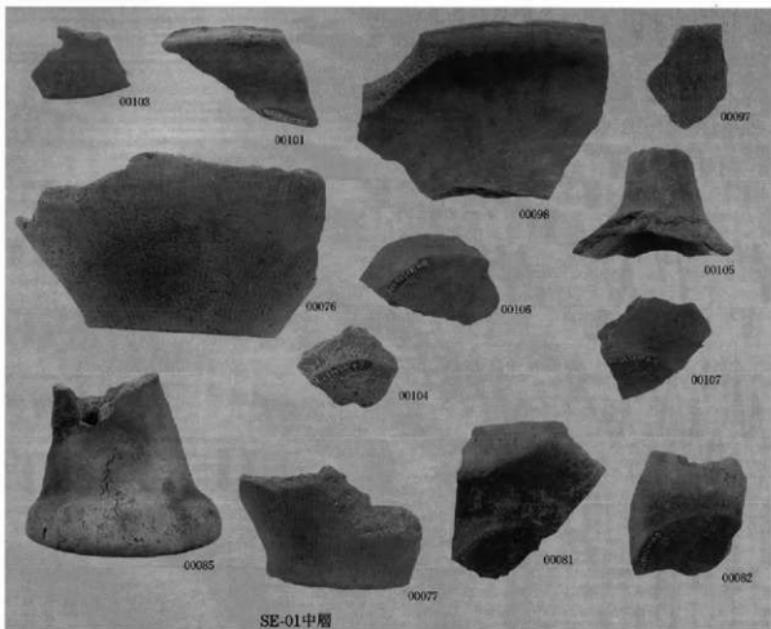
2) 第10号竪穴住居跡遺物出土状況



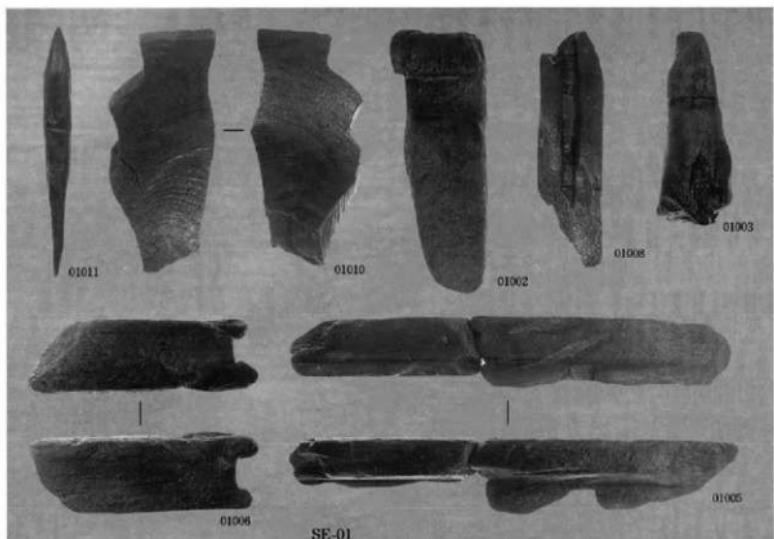
4) 第6号井戸完掘状況



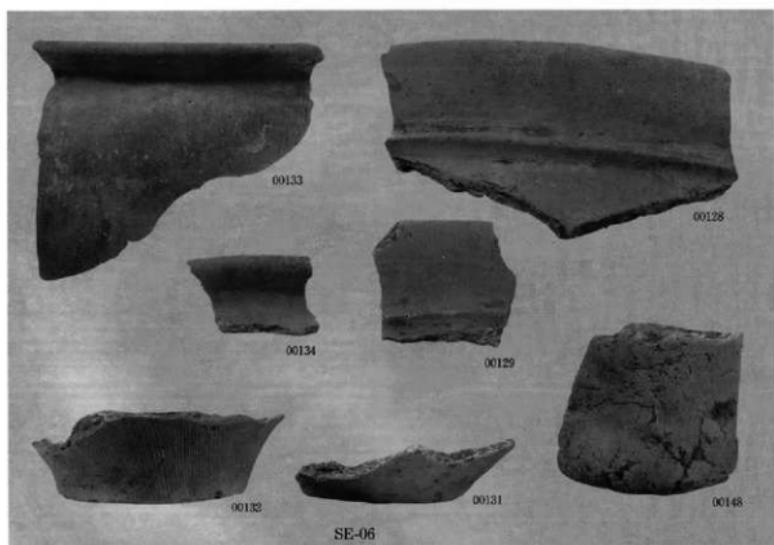
第1号井戸出土土器(1)



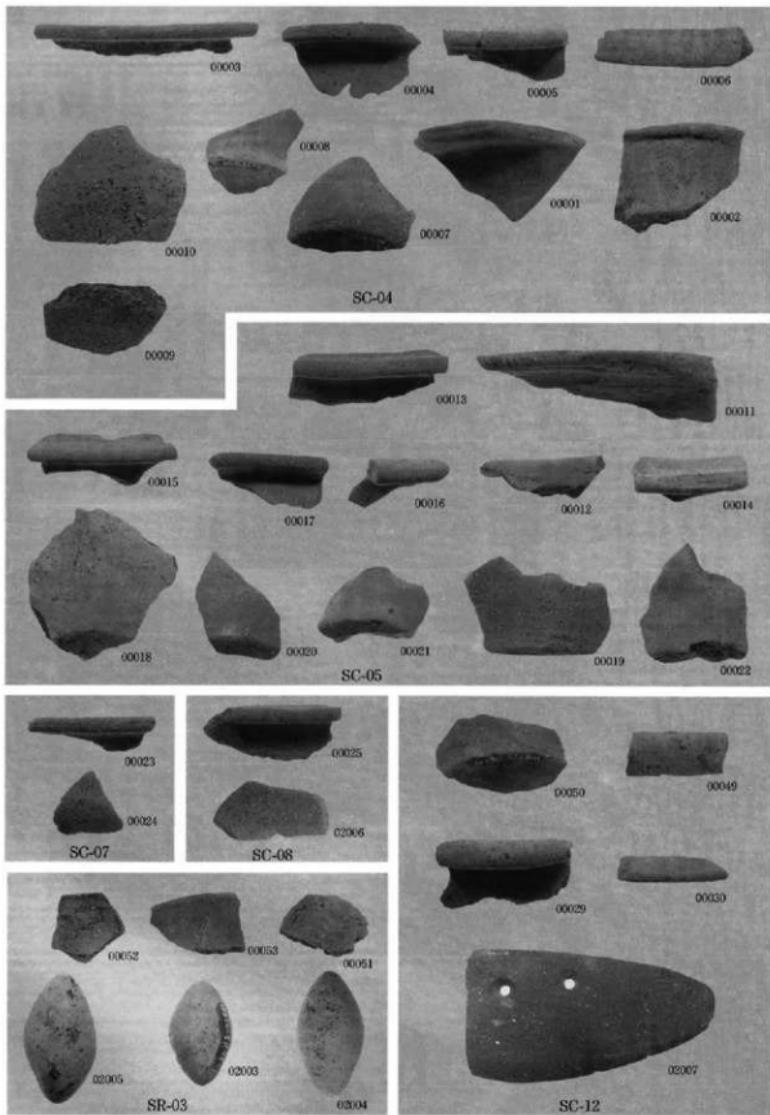
第1号井戸出土土器(2)



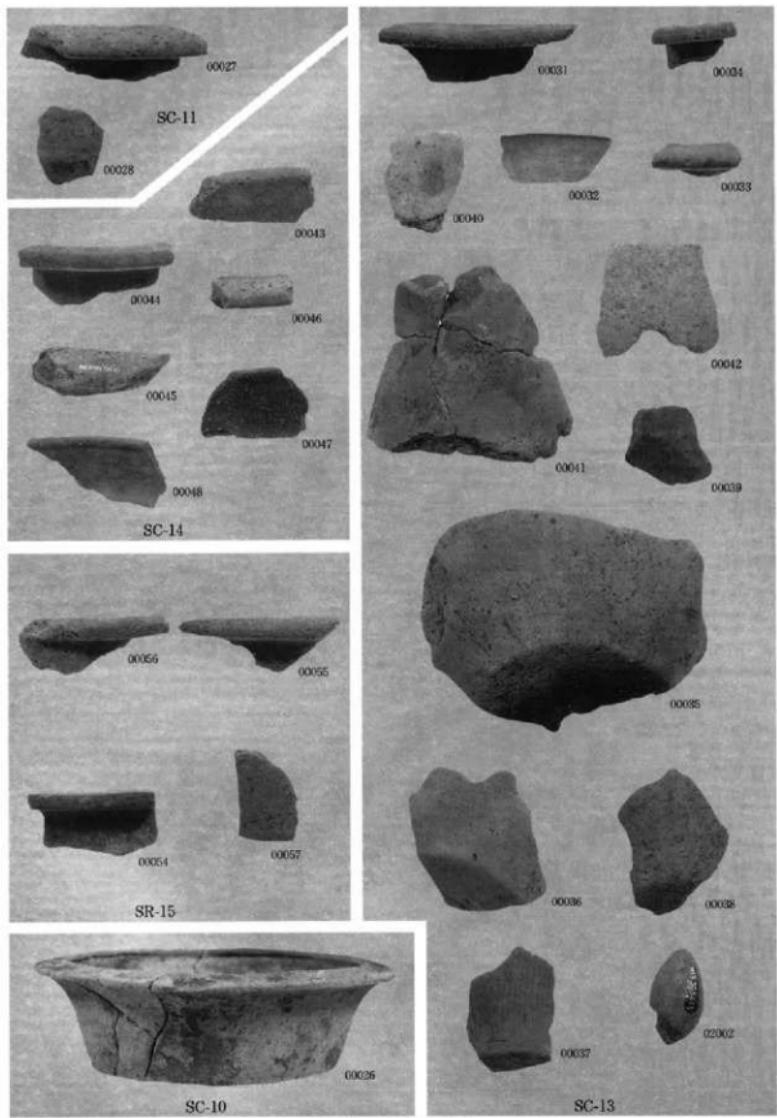
1) 第1号井戸出土木製品



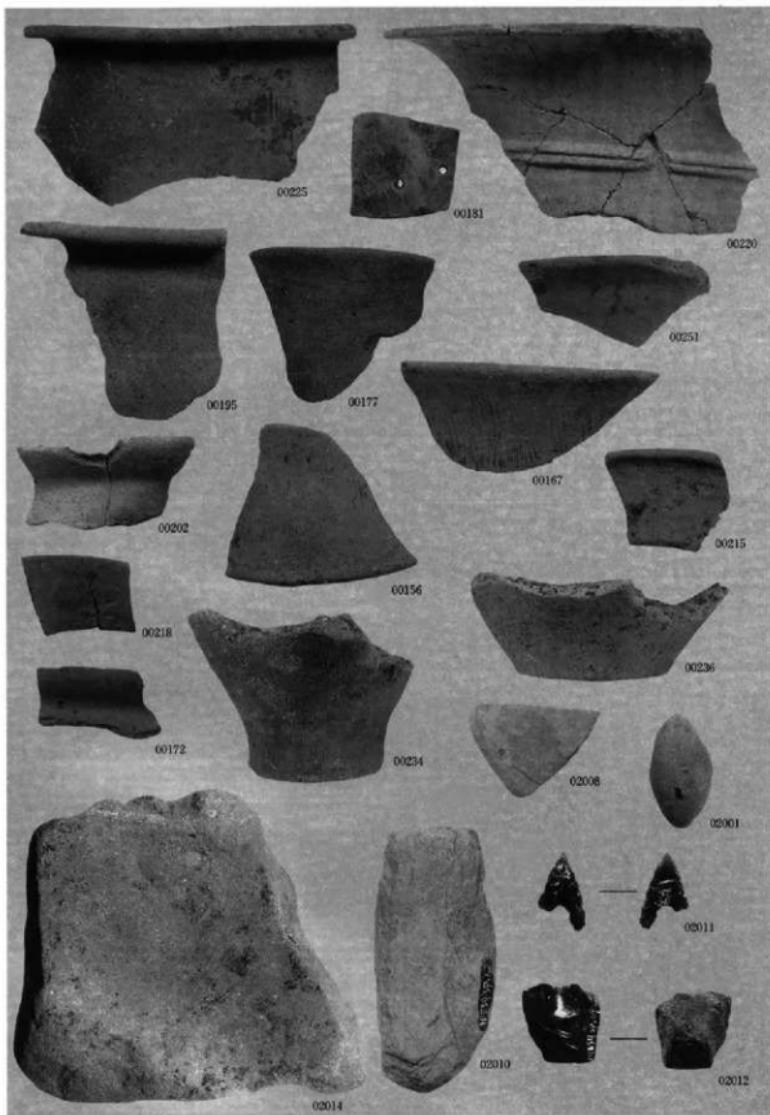
2) 第6号井戸出土遺物



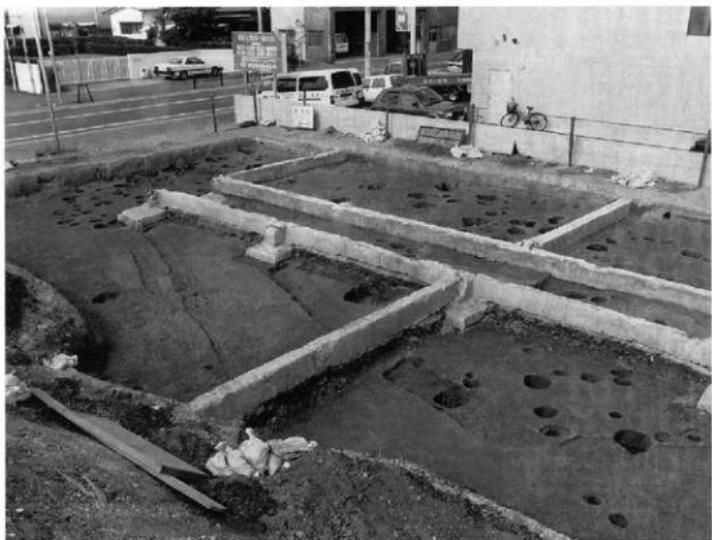
竖穴住居跡出土遺物(1)



堅穴住居跡出土遺物(2)



各柱穴出土遺物



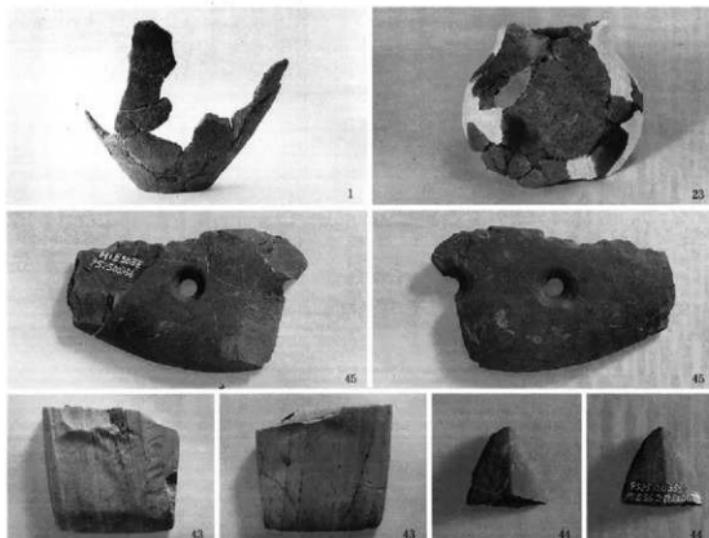
1) A区遺構検出状況（南から）



2) B区遺構検出状況（東から）



1) 第2号竪穴住居跡検出状況（北東から）



2) 出土遺物（縮尺不同）

H I E
比 恵 遺 跡 群 23

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第520集

1997年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印 刷 秀巧社印刷株式会社
福岡市南区向野2丁目13番29号